

平成28年度 英語教育強化地域拠点事業における取組状況（案）

1. 調査の目的

- 英語教育強化地域拠点における研究の取組状況を把握し、現時点の成果・効果や課題を分析した上で関係者が情報を共有し、強化地域拠点や研究校の今後の研究の充実に資する。
- 具体的な取組の状況について調査した結果を次期学習指導要領の改訂に向けた参考とし、今後の施策の検討に資する。

2. 調査の対象・期間

※本事業は平成26年度より4年間実施予定

- 調査対象
英語教育強化地域拠点事業 29 拠点（研究校217校）
- 調査期間
平成28年6月24日～平成28年7月29日
- 主な調査項目
 - ・小・中・高等学校で一貫したCAN-DOリスト形式の学習到達目標の設定及びそれに基づいた指導と評価（パフォーマンス評価を含む）に関すること
 - ・小学校における「外国語活動型（中学年）」「教科型（高学年）」の指導に関すること
 - ・中・高等学校における言語活動の充実や高度化に関すること 等

3. 主な調査結果

小学校

- (1) CAN-DOリスト形式の学習到達目標の設定、及びそれに基づいた指導と評価（パフォーマンス評価を含む）の工夫・改善
 - CAN-DOリスト形式の学習到達目標を設定し、単元計画等の作成や教員同士の指導法の共有等に活用する学校が増えている（94.8%）。
 - パフォーマンス評価を実施している学校の多くでスピーキングテストを実施（94.1%）。具体的には、インタビュー（面接）、スピーチ、児童同士による会話やスキットなど。
 - 「教科型（高学年）」における評価では、「評定のみ」が22.4%、「文章記述のみ」が60.3%、「評定と文章記述の両方」が9.5%となっている。
 - 設定したCAN-DOリスト形式の学習到達目標を活用して、年間指導計画の見直し・整備を進め、指導と評価の改善に生かすことが必要である。
 - 「教科型（高学年）」の評価の観点やパフォーマンス評価の実施方法等について研究を進めることが必要である。
- (2) 指導体制に関すること
 - ほとんどの学校で学級担任が主たる授業者となっている（中学年は94.0%、高学年は92.2%）。半数程度の学校で学級担任以外の教員を活用し（中学年43.1%、高学年51.7%）、学級担任の授業を補助する者となっている。また、ALTや英語が堪能な日本人等の外部人材の活用が多い（中学年96.6%、高学年94%）。
 - 外国語教育の担当者（中核教員、研修主任等）が全学級の授業に関わることで、第3～6学年の授業に関わっている学校も数校ある。
 - 小学校教員全体の指導力向上を図るとともに、教科指導における専門性の向上を図る研修を充実させることが必要である。
- (3) 弾力的な授業時間の設定及び時間割の設定に関すること

【短時間学習】（53.7%の学校で短時間学習を実施）

 - 授業内容と関連させ（91.4%）、ゲーム、歌やチャンツ、ジングル、アルファベットを読む・書く活動等に取り組んでいる。
 - ほぼ毎日、児童が英語と触れる時間を作ることによって、児童の学習意欲の向上

が見られるなどことができる。

- 短時間学習を年間指導計画及び単元計画に明確に位置付けた上で、本体45分の授業内容と関連させて計画的に実施することが必要である。
- これまで朝自習に設定していた漢字や計算、読書の時間をどうするか、教育課程全体で考える必要がある。

【週2コマの授業】（54.6%の学校で週2コマの授業を実施）

- 児童が英語をじっくりと聞く時間・話す時間を確保することができるため、定着が進む。また、指導者が授業中に児童の活動を見取り、評価することができる。
- 「読む」「書く」の時間を十分に設定し、個に応じたきめ細かい指導ができる。
- 余剰の授業時数が少なくなったので、これまで行っていた他教科で定着を図るための補足的な指導の時間が確保できなくなっている。

(4) その他

- 総合的な学習の時間、社会、国語等との関連を図り、地域教材を活用して発信力を高める取組を実施している学校がある。
- 国語科との意識的な関連が図られていない学校が多い。アルファベットの文字の認識を深める指導、日本語と英語の音声の違いやそれぞれの特徴への気付きを促す指導、語順の違いなど文構造への気付きを促す指導等について、意識的に国語科の内容との関連を図る必要がある。

中学校

- (1) 小学校で「教科型」を経験した生徒の中学校導入期における指導
 - 小学校で「教科型」を経験した生徒は、経験していない生徒に比べて、英語学習や英語でのコミュニケーションに対する積極性が高いなどの違いが見られる。これらの違いを踏まえて、英語による指示を増やしたり小学校で扱った表現を使った活動を取り入れたりするなど、導入期での指導を変えている（89.1%）。
- (2) CAN-DOリスト形式の学習到達目標の設定、及びそれに基づいた指導と評価（パフォーマンス評価を含む）の工夫・改善、言語活動の充実等
 - 96.4%の研究校でCAN-DOリスト形式の学習到達目標を設定し、そのうち96.2%で教員間での指導方法の共有や年間指導計画・単元計画の作成等に活用している。
 - パフォーマンス評価を実施している研究校では、94.3%でスピーキングテスト、90.0%でライティングテストを行っている。
 - 90.9%の研究校で教育目標や学習内容の高度化を図っている。そのうち92.0%で、互いの考えや気持ちなどを英語で伝え合う言語活動の充実を図っている。
 - 即興的なコミュニケーションを重視した言語活動を取り入れることが必要である。

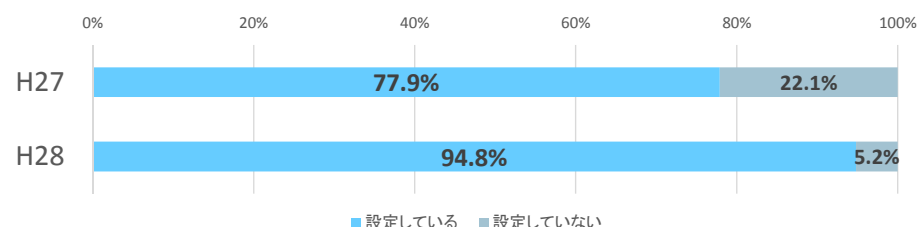
高等学校

- (1) CAN-DOリスト形式の学習到達目標の設定、及びそれに基づいた指導と評価（パフォーマンス評価を含む）の工夫・改善、言語活動の高度化等
 - 97.8%の研究校でCAN-DOリスト形式の学習到達目標を設定し、そのうち93.3%で教員間での指導方法の共有や年間指導計画・単元計画の作成等に活用している。
 - パフォーマンス評価を実施している研究校では、88.4%でスピーキングテスト、67.4%でライティングテストを行っている。
 - 93.5%の研究校で、英語による発表、討論・議論、交渉といった言語活動の高度化に向けた取組を実施している。
 - 研究内容や授業改善の成果について、研究校内だけでなく、研究校以外の英語担当教員と情報共有・普及する機会を充実させることが必要である。

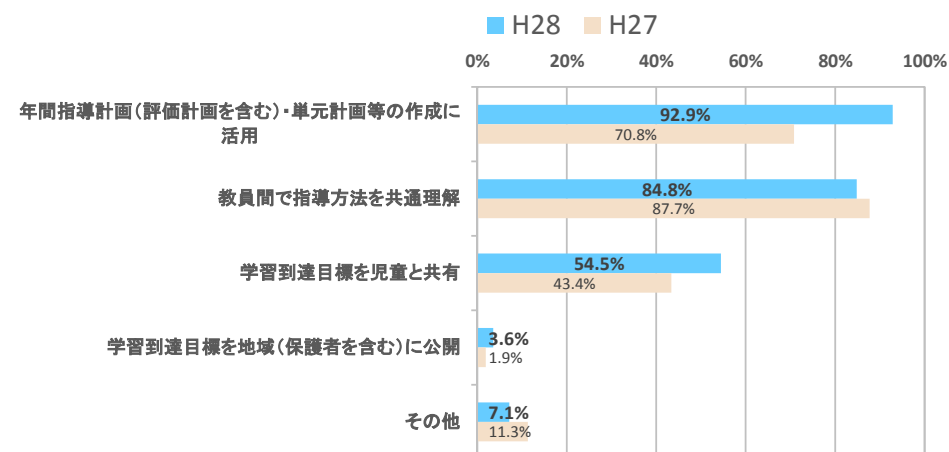
学習到達目標の設定、評価方法の工夫・改善① (案)

- 小学校の94.8%がCAN-DO形式の学習到達目標を設定（H27は77.9%）。そのうち、80.0%で小・中・高等学校間で一貫した学習到達目標を設定。
- 小学校の96.6%が学習到達目標に到達するため、指導方法の工夫・改善を行っている（H27は93.8%）。
- 指導方法の工夫・改善を行っている学校のうち、92.9%が「年間指導計画（評価計画を含む）・単元計画等の作成」に活用（H27は70.8%）。

1. 「CAN-DOリスト」形式の学習到達目標を設定しているか。



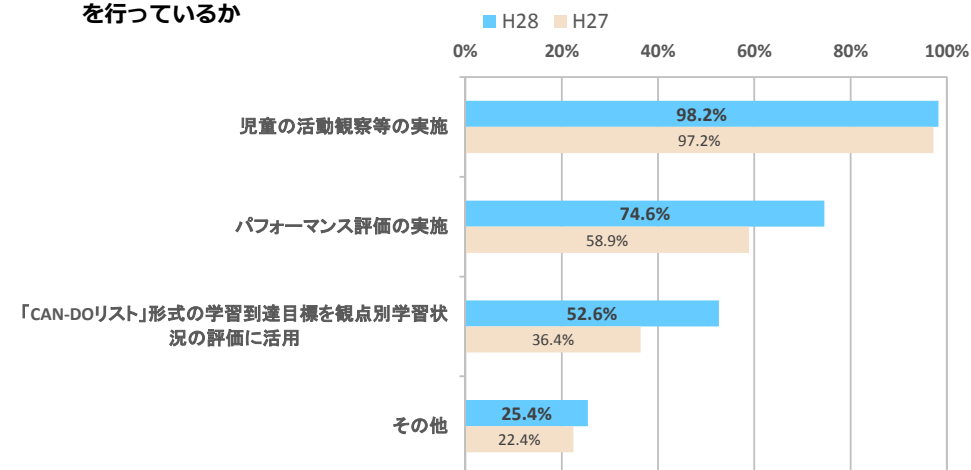
2. 設定した学習到達目標に到達するため、指導方法の工夫・改善を行っている場合、設定した学習到達目標をどのように活用しているか。



学習到達目標の設定、評価方法の工夫・改善② (案)

- 小学校の98.3%が評価方法の工夫・改善を行っている（H27は94.7%）。
- 評価方法の工夫・改善を行っている学校のうち、74.6%が「パフォーマンス評価」を実施（H27は58.9%）。

Q. 評価方法の工夫・改善を行っている場合、具体的にどのような工夫・改善を行っているか



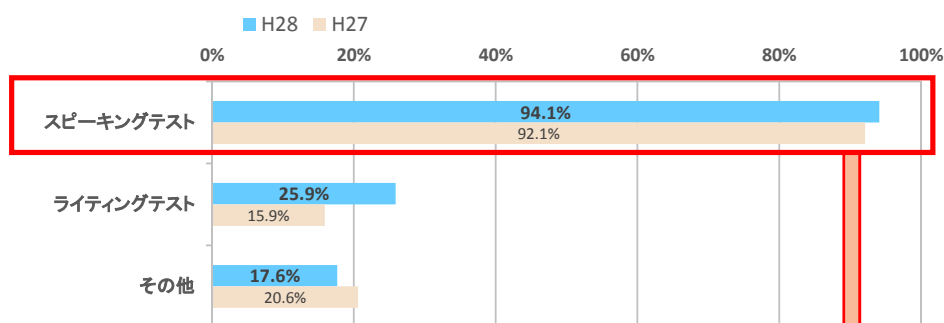
〈その他の内容〉

- 授業の中に、指導者が全児童一人一人と会話する活動時間を設け、パフォーマンス評価と同じような評価が行えるよう計画し、評価を実施。
- ワークシートや授業の最後を書く「振り返りカード」等を、児童ごとに1冊のファイルに綴じさせ、それを学期末の評価に活用。
- 学期末に1回、総括的なペーパーテストを実施。今後は、単元ごとに小テストの実施を計画中。
- タブレットを活用した評価（スピーチやスキット等の児童の様子を動画撮影し、授業後に学級担任、専科教員、ALTで視聴して評価）を実施。
- ALTと1対1でのconversation timeを実施。
- 授業終末の「まとめの場」でペア活動を設け、英語表現等が使えるようになった自己の変容を実感させた上で、「振り返りの場」で「振り返りシート」を記入。

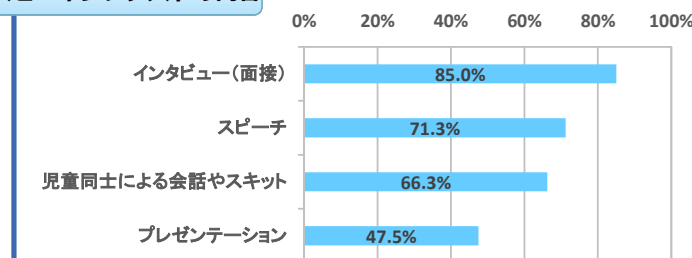
学習到達目標の設定、評価方法の工夫・改善③ (案)

- パフォーマンス評価を実施している小学校のうち、94.1%でスピーキングテストを実施。
- スピーキングテストの内容は、インタビュー（面接）が85.0%、スピーチが71.3%、児童同士による会話やスキットが66.3%である。

Q.「パフォーマンス評価の実施」では、具体的にどのような評価を行っているか。



スピーキングテストの内容



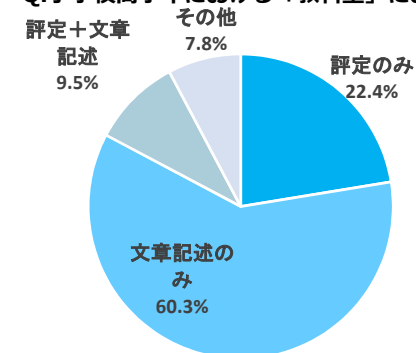
〈パフォーマンス評価のその他の内容〉

- 授業の中で、指導者が児童一人一人と会話する機会を設け評価を実施。
- 6年生の3月にパフォーマンス評価を実施し、既習の英語表現を生かしたALTとJTEへのインタビューを行い、その中でALTやJTEからの質問に対する児童の返答内容や姿勢面を評価。

学習到達目標の設定、評価方法の工夫・改善④ (案)

- 小学校5・6年生の「教科型」では、「文章記述による評価のみ」が60.3%、「評定のみ」が22.4%、「評定と文章記述の両方」が9.4%。

Q.小学校高学年における「教科型」においては、具体的にどのような評価を行っているか。



〈その他の内容〉

- 指導要録では観点ごとに3段階の評価と評定を記入、通知表では観点ごとに3段階の評価。
- 観点ごとに到達目標を設定し、達成している場合はその観点到に○を付ける。
- 評定は全員が対象で、文章記述は特に学習状況が優れていた児童が対象。

〈具体的な評価方法、評価場面等の例〉

【評価の観点】

- ①主体的に学習に取り組む態度、②思考力・判断力・表現力、③知識・理解の三観点で観点別評価を実施。

【評価方法】

- 教師による行動観察及びビデオ撮影映像の分析による授業観察に加え、CAN-DOリストに基づく自己評価及び教師による評価。
- ①関心・意欲・態度…観察・振り返りカード、②理解(聞く)・表現(話す)…会話活動の観察・パフォーマンス評価、理解(読む)・表現(書く)…アルファベット文字の書き取り、単語や短文の書き写し。

【評価場面】

- 授業終末に振り返りの時間を位置付け、振り返りカードを活用し、学級担任・英語コーディネーター・ALTの3名によるパフォーマンス評価(話す、聞く)、自己評価・感想(関心・意欲)により評価。
- 単元ごとにパフォーマンス評価を実施。行動観察は、1単元で全児童を網羅できるように計画。

【短時間学習の評価】

- 短時間学習では、T2で入る教員が児童の様子をみとり、児童の良かったところ・がんばったところを中心に担任に伝達。短時間学習のT2としては、担任以外(理科専科等)も参加し、全校体制で実施。

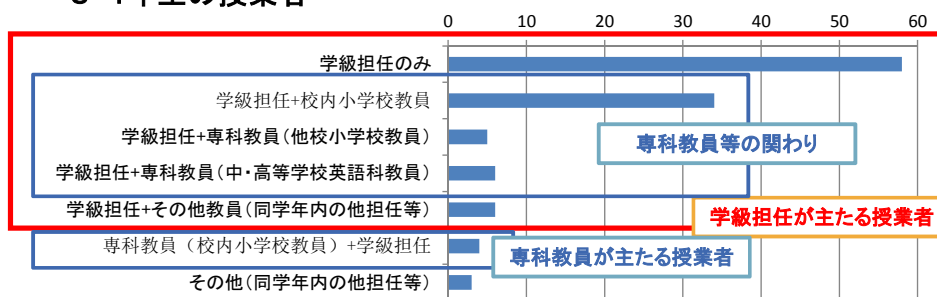
研究校(小学校)での指導体制① (案)

- 3・4年生では、94.0%の小学校で「学級担任」が主たる授業者となっている。43.1%の小学校で専科教員等を活用、86.2%の小学校でALTを活用、28.4%の小学校で英語が堪能な日本人を活用している。
- 5・6年生では、92.2%の小学校で「学級担任」が主たる授業者となっている。51.7%の小学校で専科教員等を活用、79.3%の小学校でALTを活用、17.2%の小学校で英語が堪能な日本人を活用している。

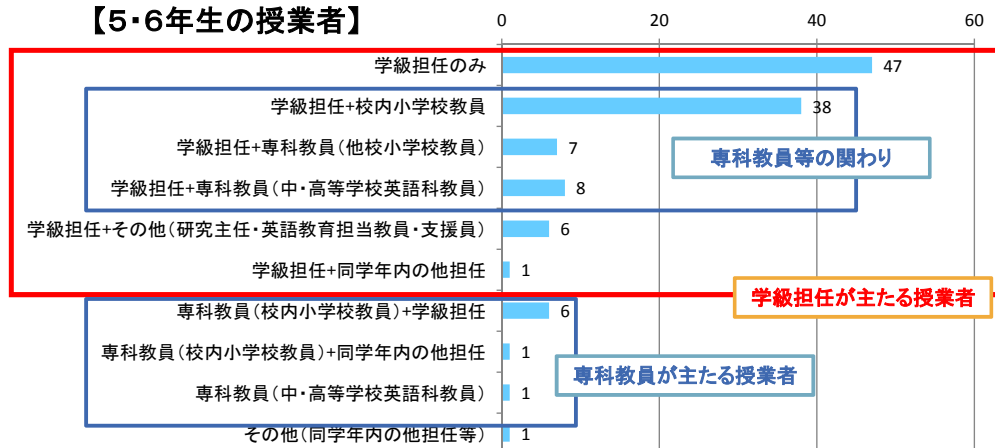
○外国語活動・外国語における指導体制について

単位は学校数(全116校)

3・4年生の授業者



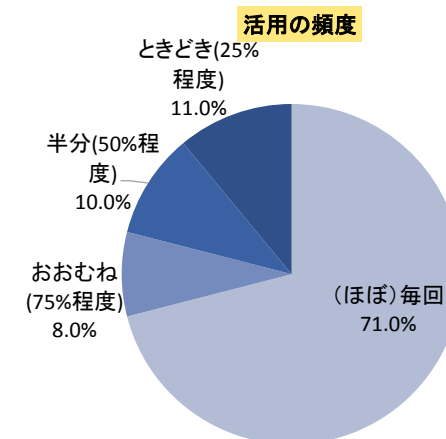
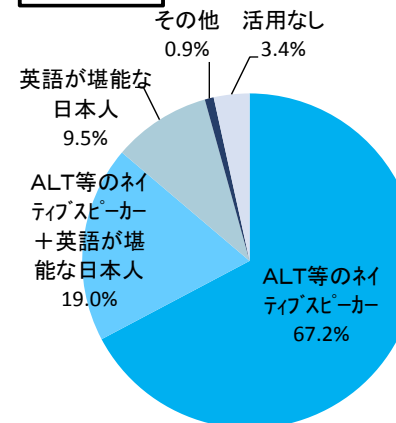
【5・6年生の授業者】



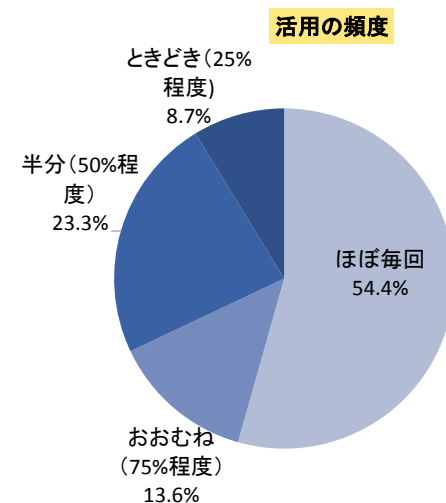
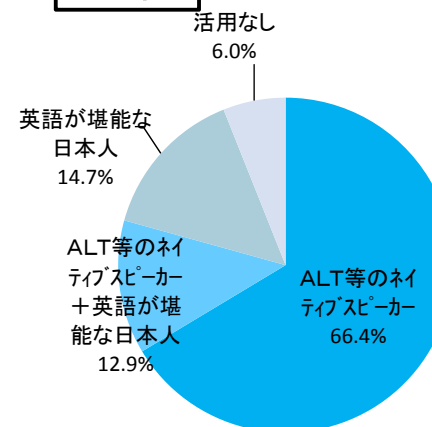
研究校(小学校)での指導体制② (案)

○活用しているALT等の外部人材について

3・4年生



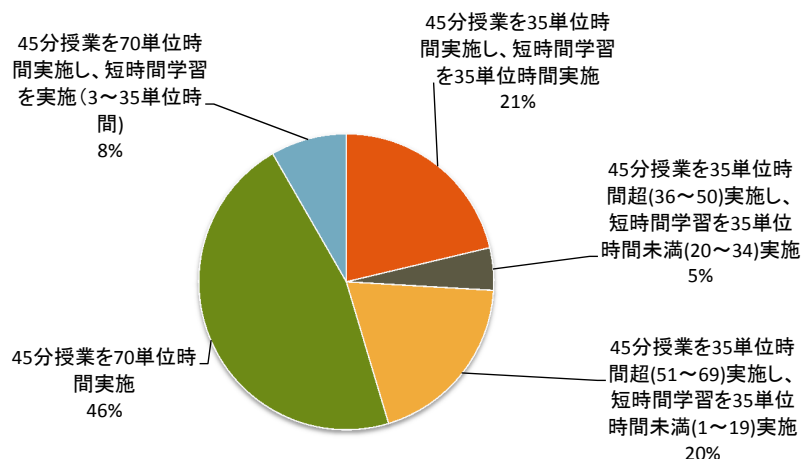
5・6年生



弾力的な授業時間の設定や時間割編成(5・6年生)①(案)

- 年間の授業時数は、93.1%の小学校が70時間以上実施。そのうち、45分授業を週2コマ実施している学校は54.6%、短時間学習を実施している学校は53.7%。
- 短時間学習の実施時間帯は、「1時間目の前(朝自習)」が63.8%、「5時間目の前(昼休み)」が29.3%。
- 短時間学習の1回あたりの時間は、「15分」が82.8%で最も多い。

教科型(5・6年生)の年間授業時間の状況



○短時間学習の実施時間帯

実施時間帯	学校数
1時間目の前(朝自習)	37校
2時間目と3時間目の間	2校
5時間目の前(昼休み)	17校
6時間目の後	1校
1時間目の前と5時間目の前	1校

○短時間学習1回あたりの時間

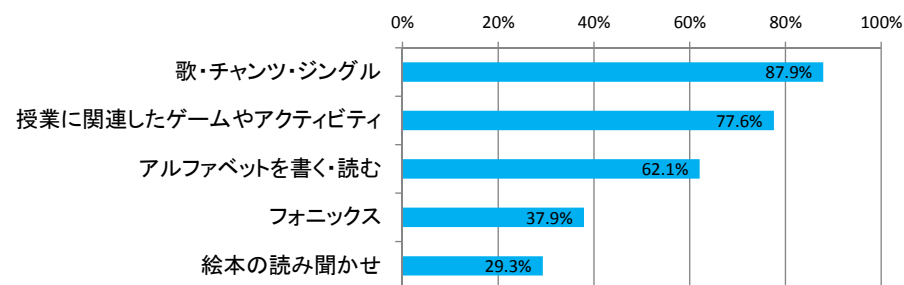
1回あたりの時間	学校数
9分	4校
10分	6校
15分	47校
23分	1校

単位は学校数(全116校)

弾力的な授業時間の設定や時間割編成(5・6年生)②(案)

- 短時間学習の実施内容は、「歌・チャンツ・ジングル」(87.9%)、「授業に関連したゲームやアクティビティー」(77.6%)、「アルファベットを書く・読む」(62.1%)などが多い。
- 91.4%の小学校で、短時間学習の内容を45分本体の授業内容と関連させている。
- 短時間学習を年間指導計画及び単元計画に位置付けた上で、45分本体の授業内容と関連させて計画的に実施することが必要である。

短時間学習の実施内容



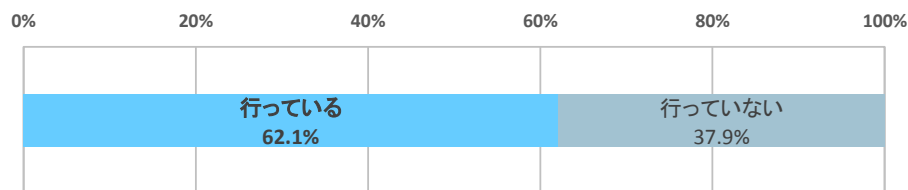
〈短時間学習の内容例〉

- 年間指導計画に基づき、絵本の読み聞かせ、歌やチャンツを通して語や表現を繰り返し聞いたり言ったりする活動、ペアで会話をする活動、辞書を活用して文字を調べる活動等を行っている。
- 単元の学習内容の習熟を図るために、単語練習、会話文練習、アクティビティー等を行う。ワークシートで単語を写したりなぞったりする。
- Hi, friends!やHi, friends! Plusをベースにして、絵本の読み聞かせ、歌やチャンツ、各種ゲーム、クイズ、アルファベット等を書くなどの活動を行う。
- 市販のDVD教材を使用し、アルファベットの綴りと音の関係を学んだり、歌やチャンツを通して語句や表現を聞いたり言ったりしている。
- NHK「プレキソ英語」を編集し直した番組や児童(国際交流委員会)作成のゲームやクイズのビデオを通し、語句や表現を聞いたり言ったりする。食べ物やスポーツなど慣れ親しんだ単語を読んだり書いたりする。6年生児童のショートスピーチを視聴し、英語表現を聞いたり言ったりする。

他教科等との関連を図った指導(案)

- 62.1%の小学校で他教科等との関連を図った指導を実施している。そのうち69.4%が年間計画に位置付けている。
- 関連を図っている教科等は、社会科(48.6%)、総合的な学習の時間(37.5%)、国語科(29.1%)、家庭科(16.7%)などである。
- 特に、国語科との連携を年間計画に位置付け、計画的に進める必要がある。

Q.小学校中学年・高学年で、他教科等との関連を図った指導を行っているか。



関連を図っている例

【国語科】

- 国語科のローマ字学習を、アルファベット文字の練習・単語書きに接続し、ローマ字表記と単語の綴りの違いへの気付き、文構造の違いへの気付きを促す。
- 国語科でローマ字はヘボン式を扱い、外国語活動や英語科の音に近いことを学ばせる。

【社会科】

- 社会科で世界の国々について調べたことを、英語で行きたい国やそこで見たり食べたりしたい物を伝え合う活動につなげた。
- 地域や都道府県について調べたことを、英語で紹介する活動につなげた。

【総合的な学習の時間】

- 地域学習で調べたこと(観光名所、特産品等)を、交流学习で他地域に英語で紹介する活動につなげた。
- 地域学習で調べたことをもとに、英語で地域を道案内する活動につなげた。

【家庭科】

- 家庭科で学習したことをもとに、栄養バランスを考えて英語で「ランチメニュー」を作る活動につなげた。

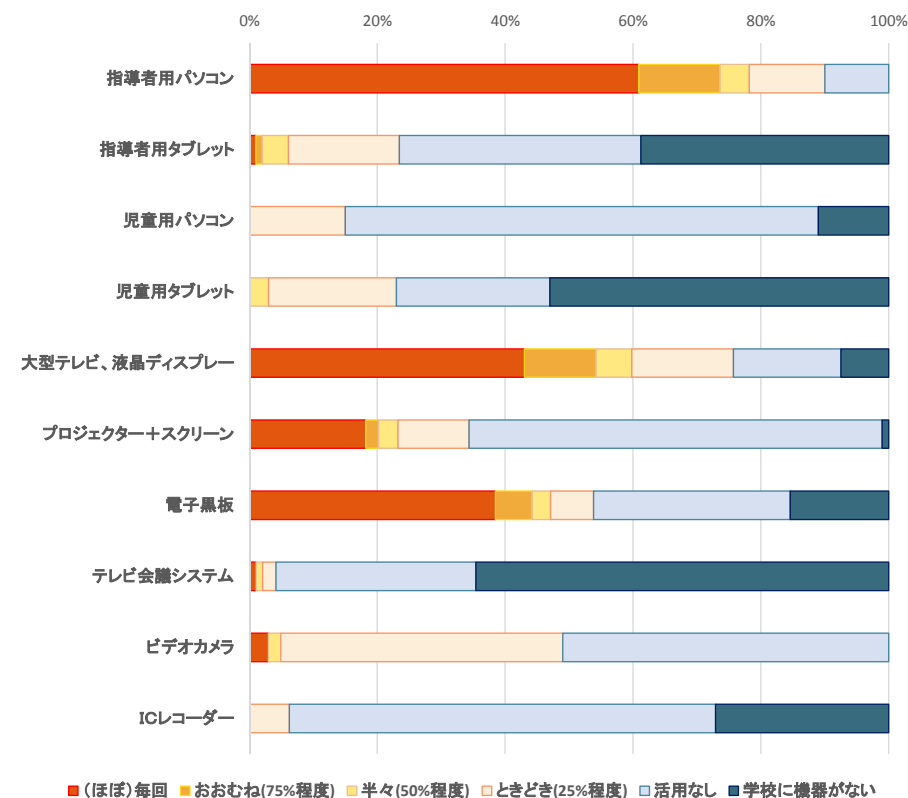
【道徳の時間】

- 英語での誕生日カードづくりで行った友達の良さを見つける活動を、道徳の時間につなげた。

研究校(小学校)でのICTの活用①(案)

- 指導者用パソコンの活用率が高く(85.3%)、指導者用タブレットを活用している学校(19.8%)もある。
- 児童への提示方法は、「大型テレビ、液晶ディスプレイ」の活用率が高く(69.8%)、「電子黒板」(48.2%)、「プロジェクター+スクリーン」(29.3%)も活用されている。
- タブレットやテレビ会議システムは、導入されていない学校が多い。

授業で活用しているICT機器等とその頻度



その他・・・CDプレーヤー、書画カメラ、電子辞書

研究校(小学校)でのICTの活用②(案)

- Hi, friends!やHi, friends! Plus、絵本のデジタル版を活用し、映像と音声を一体的に、繰り返し提示することで児童の聞くこと・話すこと・読むこと・書くことの向上を図っている取組が見られる。
- タブレットが導入されている学校では、撮影機能を評価に活用したり、個別学習のツールとして活用するなど、先進的な取組が見られる。

〈指導者用パソコン+大型テレビ等の活用例・効果〉

- Hi, friends!デジタル版、Hi, friends! Plusデジタル版、絵本デジタル版を提示。
 - 児童の興味・集中力を高めることができる。
 - (ALTが不在でも)英語の発音を繰り返し聞かせることができ、児童の聞く力・話す力が向上。
 - アルファベットの書き方を発音とともに繰り返し提示し、文字指導に効果的。
 - 会話のデモンストレーションを提示することで、児童が活動をイメージしやすく、説明を簡略化(活動時間の確保)できる。
 - 映像と音声を一体化して提示できるので、チャンツや歌、ゲーム等の活動をスムーズに行うことができる。
 - 国際理解のための、外国の写真や動画を簡単に提示できる。
- 自作のパワーポイント教材、市販教材、DVD等を提示。
 - パソコンがあれば、様々な教材、メディアに対応できる。
 - 時間をかけずに、独自教材の作成と提示ができる。

〈指導者用タブレットの活用例・効果〉

- 児童の活動の様子や作品・ワークシート等を撮影。
 - 撮影した児童の活動の様子をデモンストレーションとして提示。
 - 撮影した児童作成の作品やワークシート等を使ったクイズを作成。
 - 撮影した映像や画像を評価に活用。

研究校(小学校)でのICTの活用③(案)

〈児童用タブレットの活用例・効果〉

- グループで、インタビュー等の活動の様子を児童がお互いに撮影。
 - 児童が自分の姿を客観的に見ることができ、自己評価の力が高まる。
 - 教師が評価に活用できる。
- 調べ学習やスピーチのプレゼン資料作成に活用。
 - 児童の表現方法の多様化、意欲の向上。
- 発音練習やアルファベットを書く練習に活用。
 - 習熟度に応じた個別学習が可能。

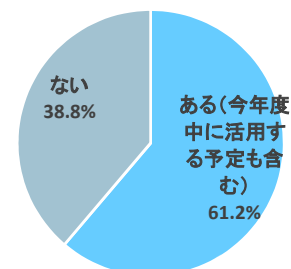
〈ビデオカメラの活用例・効果〉

- スピーチや紹介活動を撮影し、他校との交流に活用。
 - 他小学校と交流したり、中学生のスピーチを録画し小学生に見せたりする。
- 授業中の活動やパフォーマンステストの様子を撮影。
 - 評価に活用。専科教員や他教員と一緒に見ることでパフォーマンス評価の方法や共通理解に役立つ。
- ALTによるデモンストレーションを撮影し、授業で提示。
 - 教材化することで、ALT不在時でも生きた英語に触れさせることが可能。

研究校(小学校)における外部試験等の活用

- 児童の英語力を定量的に測るために、外部試験等を活用した学校(平成28年度中に活用予定も含む)は61.2%。

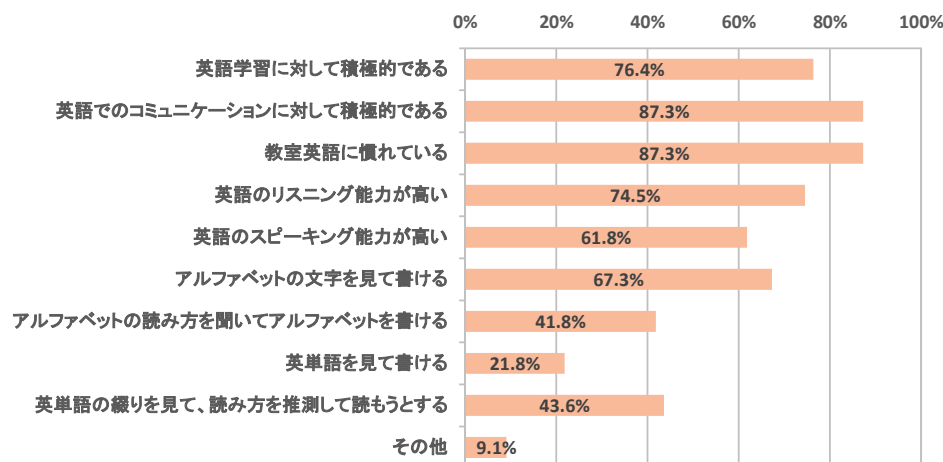
Q.児童の英語力を定量的に測るために、外部試験等を活用したことがあるか?



小学校で「教科型」を経験した生徒の中学校導入期における指導(案)

- 小学校で「教科型」を経験した生徒は、経験していない生徒に比べて、英語学習や英語でのコミュニケーションに対する積極性が高い。また、英語を聞いたり話したりすることに慣れていることに加え、アルファベットの文字を読んだり書いたりすることへの抵抗感が少ない。
- 89.1%の中学校で、これらの違いを踏まえて、中学校導入期での指導を変えている。

1. 小学校で「教科型」を経験した生徒は、「教科型」を経験していない生徒と比べて、中学校導入期(中学校1年生の1学期)でどのような違いが見られたか。(複数選択可)



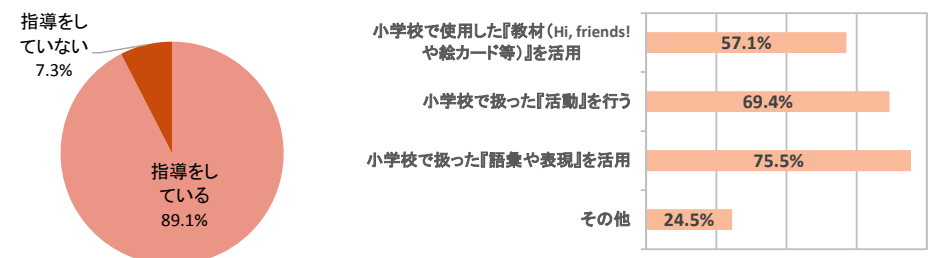
2. 「教科型」を経験した生徒に対して、中学校導入期での指導をどのように変えたか。

- 英語による指示を増やし、英語の音声に触れる機会を多くするとともに、英語を聞いて類推したり理解したりする活動を多く取り入れた。
- 小学校で学習した表現を使ったQ&A活動、小学校で扱った単語を書く活動を取り入れた。
- Hi, Friends! で扱われている題材、語彙・表現、活動、絵カードを活用して、小学校で学習した内容との関連を重視した。
- 「対話活動で話したことを基にして書く」という指導過程を徹底。中学校で未習の表現でも、小学校で慣れ親しんでいる表現であれば、活用できるように活動を工夫した。
- 小学校での学習を生かし、音を聞いて単語の綴りを推測させたり、単語の綴りを見て音を推測させたりするなどして、「読めてうれしい」「書けてうれしい」という思いを大切にする指導を心がけた。

小学校での学習内容との関連を図った指導(案)

- 89.1%の中学校で、小学校での学習内容との関連を図った指導を実施。
- 小学校で扱った教材、活動、語彙や表現を活用しながら、語彙を増やしたりレベルを上げたりするなどの工夫をしている。

1. 授業の中で、小学校での学習内容との関連を図った指導をしているか。



〈小学校で使用した「教材(Hi, friends!や絵カード)」を活用した事例〉

- 新出文型の導入時に、関連するHi, friends!のチャンツを聞かせ、小学校での内容を想起。
- Hi, friends! の絵カードやイラストを活用。
- Hi, friends! Plus のアルファベット・ジングルを活用。
- 生徒が小学校時に作成したワークシートを引き継ぎ、中学校での自己紹介活動に活用。

〈小学校で扱った「活動」を行う事例〉

- 小学校で扱った「Simon saysゲーム」「ポインティングゲーム」「キーワードゲーム」「3ヒントクイズ」等を、中学校でも授業に常活動として取り入れ、Warm-upに活用。
- 小学校で扱ったチャンツやインタビュー活動、グループ・ワークを取り入れながら、少しレベルアップした内容にアレンジ。
- 自己紹介、買い物、道案内など、小学校での活動を想起させる言語活動を実施。

〈小学校で扱った「語彙や表現」を活用する事例〉

- 毎授業の開始時に行う会話練習に、小学校で扱った語彙や表現を活用。
- 小学校で行っている常活動(即興で質問に答える活動)を継続しながら、クラスルーム・イングリッシュを高度化。
- 小学校で扱った表現を使いながら、つなぎ言葉や内容の聞き返しによって会話を即興的に続けることができるような言語活動の導入。

〈その他の内容〉

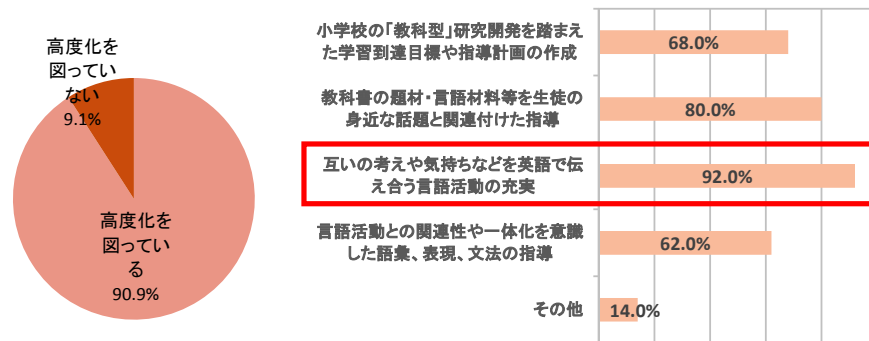
- 小学校でも指導している専科教員やALTがいることで、小学校との接続を図った教材や表現の使用場面を意図的に設定しやすい。
- 小学校での活動や意欲を継続できるように、授業内容の見直しや改善を図っている。

教育目標や学習内容の高度化・言語活動の充実(案)

- 90.9%の中学校で、教育目標や学習内容の高度化を図っている。
- 高度化を図っている中学校のうち92.0%で、互いの考えや気持ちなどを英語で伝え合う言語活動の充実を図っている。

1. 小学校高学年の「教科型」研究開発を踏まえ、1-2.「高度化を図っている」場合、具体的にどのような小学校との学びの連続性を図りつつ、教育目標や学習内容の高度化を図っているか。

0% 20% 40% 60% 80% 100%



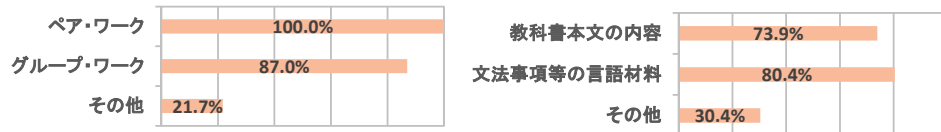
3. 互いの考えや気持ちなどを英語で伝え合う言語活動の充実に向けて、どのような取組を行っているか。

学習形態

扱う内容

0% 20% 40% 60% 80% 100%

0% 20% 40% 60% 80% 100%



〈教科書本文の内容を活用した言語活動の例〉

- 教科書の内容について How about you? What do you think? Do you like~, too? など、自分たちの生活につなげて考える機会を設定する。
- 教科書本文を生徒が興味を持ちやすい内容にアレンジしたり追加をしたりした上で、生徒に内容に関わる話題について意見交換を行わせる。

〈文法事項等の言語材料を活用した言語活動の例〉

- 言語材料の使用場面を設定し、他の言語材料を使いながら、考えや気持ち、情報などを口頭で伝え合ったり文章に書いたりする。
- 授業開始時にペアやグループによる短い会話活動を行い、既習事項や未習事項を織り交ぜて様々な表現の定着を図る。

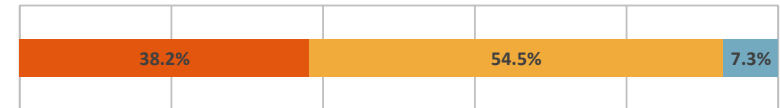
英語担当教員の英語使用状況・ALT等の活用(案)

- 授業における英語担当教員の英語使用状況は、「おおむね英語で行っている」が38.2%、「半分以上を英語で行っている」が54.5%（合計92.7%）。

※「平成27年度英語教育実施状況調査」における英語担当教員の英語使用状況は、全国平均で「おおむね英語で行っている」と「半分以上を英語で行っている」を合わせた割合が、第1学年では58.3%、第2学年では56.9%、第3学年では54.8%である。

1. 授業における教員の発話はどの程度英語で行っているか？

0% 20% 40% 60% 80% 100%



- おおむね英語で行っている(75%程度以上)
- 半分以上を英語で行っている(50%程度以上～75%程度未満)
- 半分未満を英語で行っている(～50%程度未満)

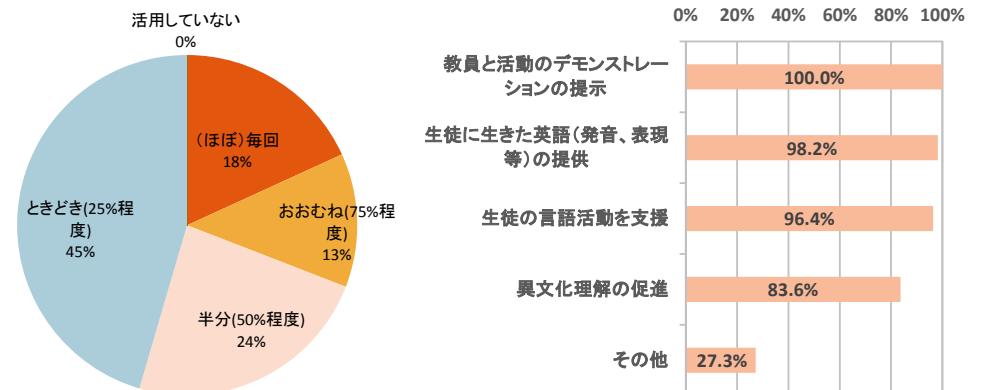
〈教員が発話を英語で行う際、生徒の理解の程度に応じた配慮の例〉

- ・指導者によるデモンストレーションで提示する。・映像などの視覚的な補助をする。
- ・ジェスチャーを交えて話す。・大事な言葉を繰り返す。
- ・難しい英語を、既習の英語や日常会話でよく使われる英語に言い換える。

2. 授業でALT等のネイティブスピーカーをどの程度活用しているか？

活用の頻度

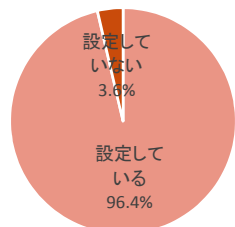
ALT等の活用方法



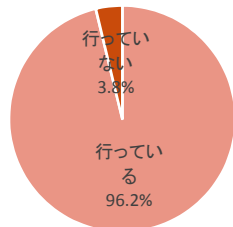
学習到達目標（CAN-DO形式）の設定・指導方法の工夫・改善（案）

- 96.4%の中学校で、「CAN-DO」形式の学習到達目標を設定。そのうち96.2%で、設定した学習到達目標に到達するため、教員間で指導方法を共有したり（84.3%）、年間指導計画や単元計画の作成に活用（92.2%）したりするなどの工夫・改善を行っている。
- 設定した学習到達目標の生徒との共有は64.7%に留まる。

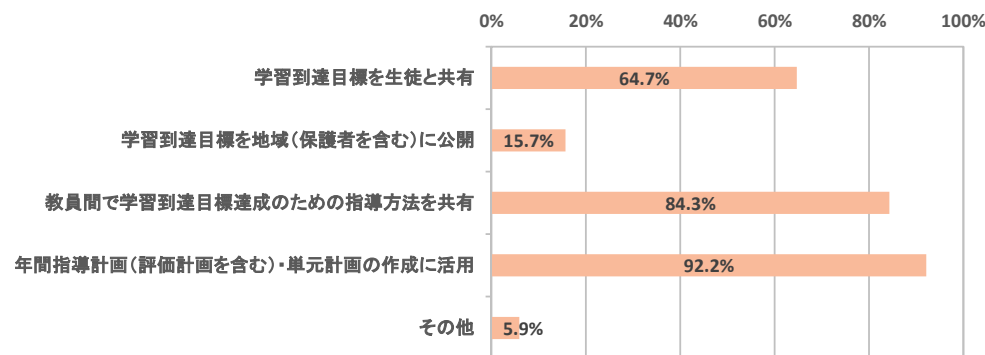
1. 「CAN-DO」形式の学習到達目標を設定しているか



2-1. 設定した学習到達目標に到達するため、指導方法の工夫・改善を行っているか



2-2. 「行っている」場合、設定した学習到達目標を具体的にどのように活用しているか



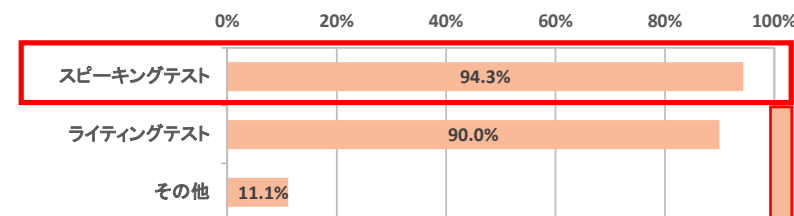
〈その他の内容〉

- 学習到達目標を基に振り返りカードを作成し、生徒が自己評価。
- 設定した学習到達目標に到達しているかどうかをパフォーマンステスト等でチェック。

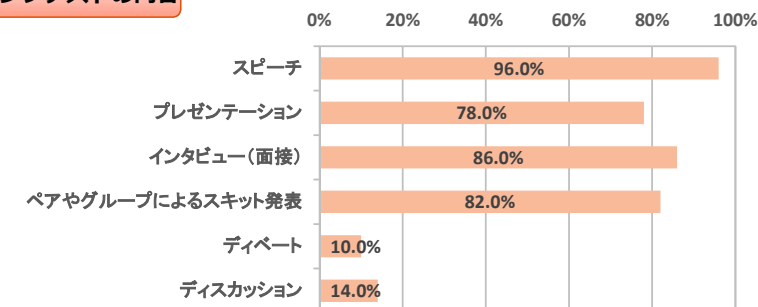
評価方法の工夫・改善（案）

- パフォーマンス評価を実施した中学校のうち、94.3%でスピーキングテスト、90.0%でライティングテストを実施。
- スピーキングテストでは、スピーチ（96.0%）、インタビュー（面接）（86.0%）、ペアやグループによるスキット発表（82.0%）、プレゼンテーション（78.0%）等を実施。

Q.パフォーマンス評価を実施した場合、具体的にどのような評価を行っているか



スピーキングテストの内容



〈パフォーマンス評価のその他の内容〉

- 動画を見ながら、その状況を英語でナレーション。
- ALTとのフリートーク。
- 初見の英文を音読し、その内容に関する口頭でのQ&A。さらに、英文の内容に関する自分の意見を英語で伝えるようなテスト。

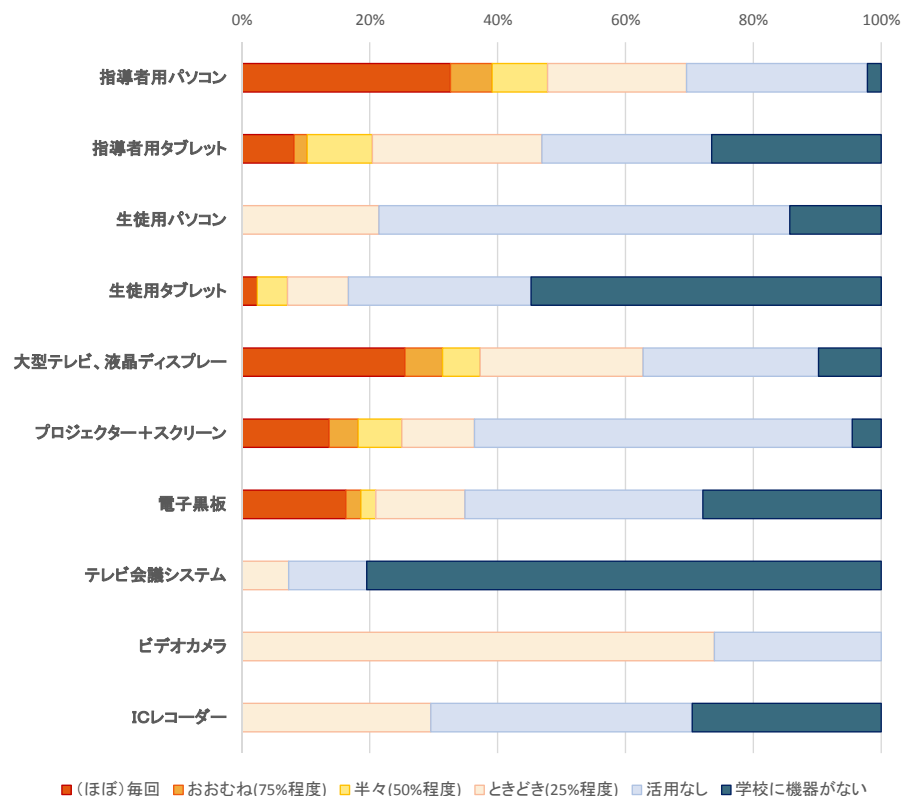
〈パフォーマンス評価の実施方法〉

- 実施回数は、学期に1回（年間2、3回）／学期に2回（年間5、6回）／単元に7～10回など。
- 「コミュニケーションへの関心・意欲・態度」及び「外国語表現の能力」の評価に活用。
- 評価における比重は、15～30%の学校が大部分だが、50%のところもある。

ICTの活用① (案)

- 指導者用パソコンの活用率が高く(69.6%)、指導者用タブレットを活用している学校も多い(46.9%)。
- 生徒への提示方法としては、大型テレビや液晶ディスプレイ(62.7%)、プロジェクター+スクリーン(36.4%)、電子黒板(34.9%)が活用されている。
- 生徒用タブレットやテレビ会議システム等が整備されていない学校も多い。

授業で活用しているICT機器等とその頻度



その他…デジタル教科書(提示、書き込み)、プレゼンソフト(生徒発表用)、書画カメラ

ICTの活用② (案)

- デジタル教科書を活用した効果的な提示により、生徒の発音改善や学習内容の理解につなげている取組が見られる。

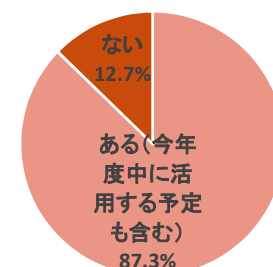
〈ICT機器等の活用例・効果〉

- 指導者用パソコンで、デジタル教科書、自作のパワーポイント資料、動画、Hi, friends!デジタル版等を提示。
→視覚情報と音声情報を組み合わせ、効果的な提示が可能。
→ネイティブの英語を繰り返し聞くことで、生徒の発音が改善。
→生徒の興味や集中力を高めるだけでなく、音声情報のみでの理解が苦手な生徒でも視覚効果があることで理解の助けに。
→Hi, friends!デジタル版を活用し、小学校の学習内容との関連を図ることが可能。
- 指導者用タブレットで、授業中のペア・ワークやパフォーマンステストの様子、生徒が書いた英文等を撮影。
→撮影したペアワークの良い例をモデル提示したり、評価に活用したりすることが可能。
- 生徒用タブレットで、生徒自身でペア・ワークの様子を撮影。また、個別学習や情報収集、生徒のプレゼンテーションに活用。
→習熟度や興味・関心に応じた個別学習が可能。

外部試験等の活用

- 87.3%の中学校で、生徒の英語力を定量的に測るために、外部試験等を活用している。

Q.生徒の英語力を定量的に測るために、外部試験等を活用しているか？



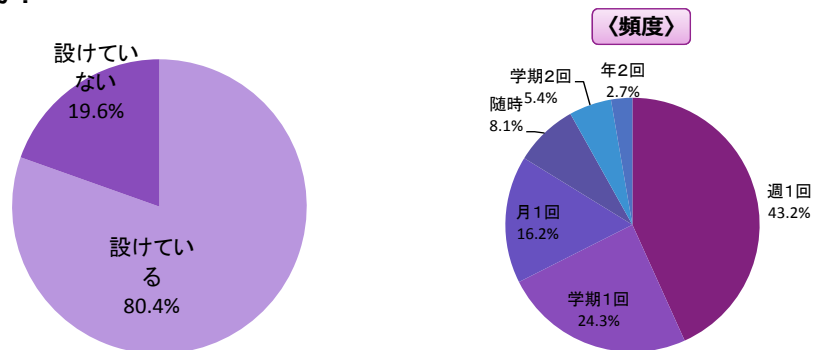
〈外部試験等の活用例〉

- 英検3級以上を取得した3年生の割合が増加した。
・平成27年1月実施…49%
・平成28年2月実施…62%
- OGTEC for Studentsのトータル・スコアが、255ポイントから304ポイントに伸びた。特に、リーディングが77ポイントから104ポイントに伸びた(H25入学生)。

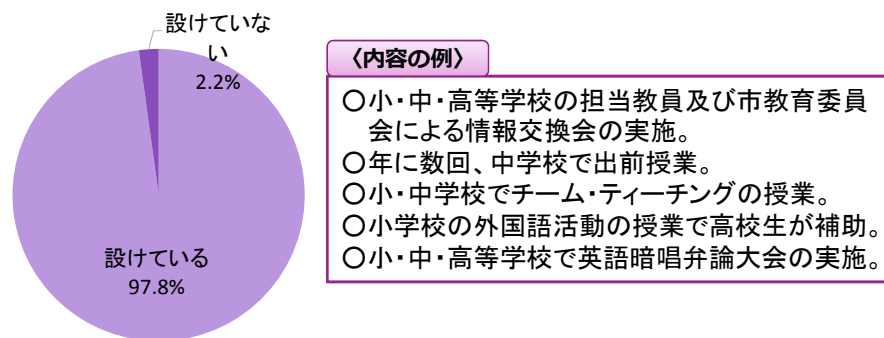
高等学校の研究校における研究内容の共有と小・中学校との連携(案)

- 80.4%の研究校で、研究内容及びその成果・課題を英語担当教員同士で共有する機会を定期的に設けている。
- 97.8%の研究校で、小学校や中学校と連携する機会を設けている。

1. 研究内容及びその成果・課題を英語担当教員同士で共有する機会を定期的に設けているか？



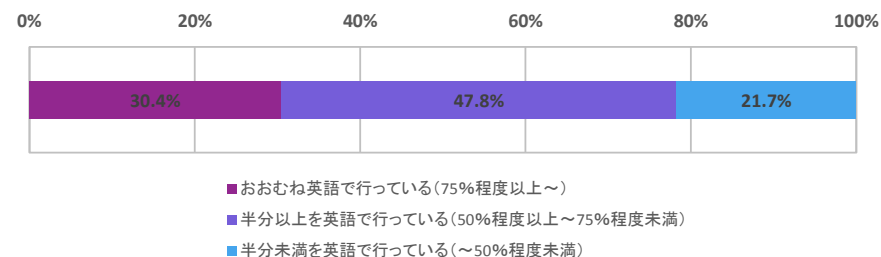
2. 小学校や中学校と連携(小学校への支援を含む)する機会を設けているか。



高等学校の研究校における教員の英語での発話・ALT等の活用(案)

- 授業における英語担当教員の英語使用状況は、「おおむね英語で行っている」が30.4%、「半分以上を英語で行っている」が47.8% (合計78.2%)。
- ※「平成27年度英語教育実施状況調査」における英語担当教員の英語使用状況は、全国平均で「おおむね英語で行っている」と「半分以上を英語で行っている」を合わせた割合が、34.4～49.6% (科目によって異なる)。

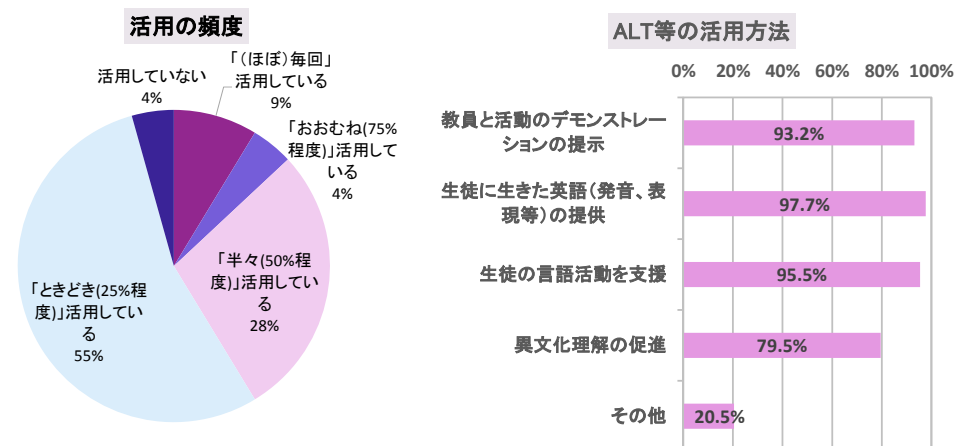
1. 授業における教員の発話はどの程度英語で行っているか？



〈教員が英語で発話を行う際の配慮の例〉

- ・生徒の反応を見ながら、簡単な語を使って言い換える。
- ・ジェスチャーを付ける。
- ・既習の平易な語や表現を用いる。
- ・生徒の理解の程度に応じて、同じ内容を何度か繰り返す。
- ・イラストや写真等の視覚的な補助資料を用いる。

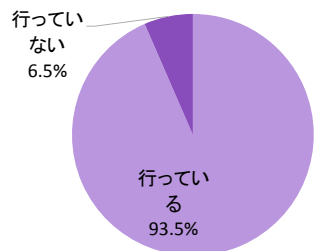
2. 授業でALT等をどの程度活用しているか？



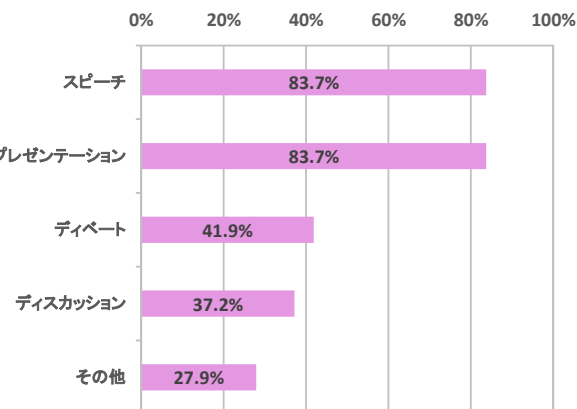
高等学校の研究校における言語活動の高度化(案)

- 93.5%の研究校で、英語による発表、討論・議論、交渉といった言語活動の高度化に向けた取組を実施。
- 具体的には、スピーチ(83.7%)、プレゼンテーション(83.7%)、ディベート(41.9%)、ディスカッション(37.2%)など。

Q.英語による発表、討論・議論、交渉といった、言語活動の高度化に向けた取組を行っているか。



Q.「高度化を図っている」場合、具体的にどのような取組を行っているか？



〈言語活動の例〉

【スピーチの例】

- 教科書の題材や身近な話題について、簡単なスピーチ活動を頻繁に実施。
- 単なる暗唱にならないよう、メモを見ながら話したり、Q&Aを取り入れて即興で話すことができるようにしている。

【プレゼンテーションの例】

- 教科書の題材に関連して生徒各自で調べたり考えたりしたことをスライドにまとめて発表。
- 日本文化、好きな映画、旅行の提案、好きな料理等について、グループで発表。

【ディベートの例】

- ペアでのミニ・ディベートを、相手を替えながら日常的に実施。
- 1学年では身近な話題についてマイクロディベートの形態で実施。学年進行に合わせて社会問題を扱う。
- 教科書の題材について、各レッスンのまとめの活動としてディベートを実施。

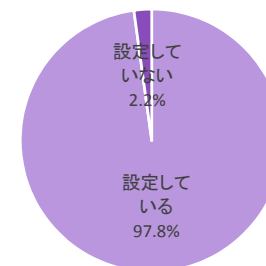
【ディスカッションの例】

- 1週間に1回程度、3～4人のグループで教科書の題材についてディスカッションを実施。
- 教師がファシリテーターとなり、Q&Aから始めスモールステップでディスカッションにつなげる。

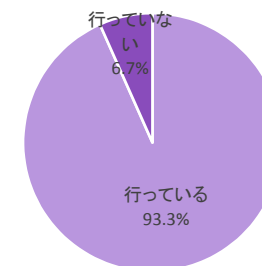
高等学校の研究校における学習到達目標(CAN-DO形式)の設定・指導方法の工夫・改善(案)

- 97.8%の研究校で、CAN-DO形式の学習到達目標を設定。そのうち93.3%の研究校で設定した学習到達目標に到達するため指導方法の工夫・改善を実施。
- 設定した学習到達目標を年間指導計画・単元計画の作成に活用したり(83.3%)、教員間で指導方法を共有したり(69.0%)している。
- 設定した学習到達目標の生徒との共有は59.5%に留まる。

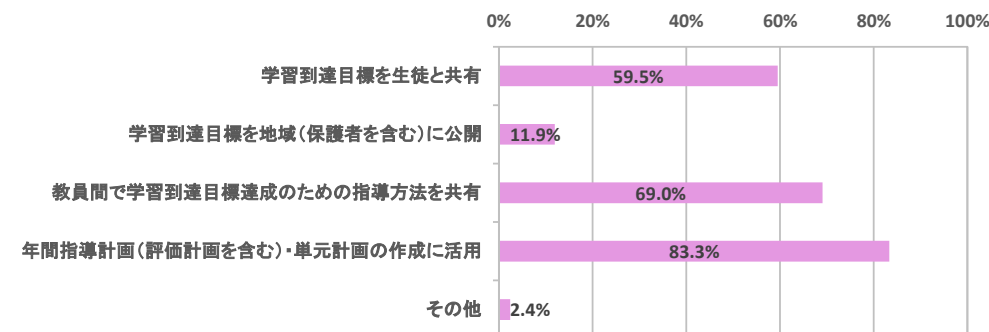
1. CAN-DO形式の学習到達目標を設定しているか



2-1. 設定した学習到達目標に到達するため、指導方法の工夫・改善を行っているか



2-2. 「行っている」場合、設定した学習到達目標を具体的にどのように活用しているか



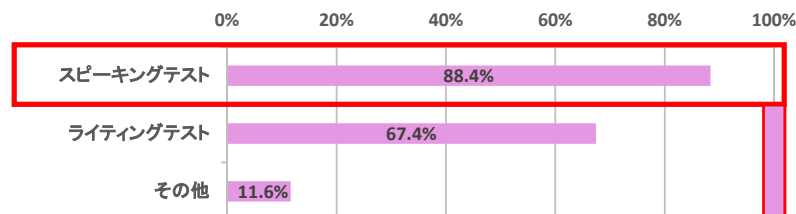
〈その他の内容〉

- ・シラバスへの反映。
- ・「英語通信」において共有。
- ・パフォーマンス評価に活用。

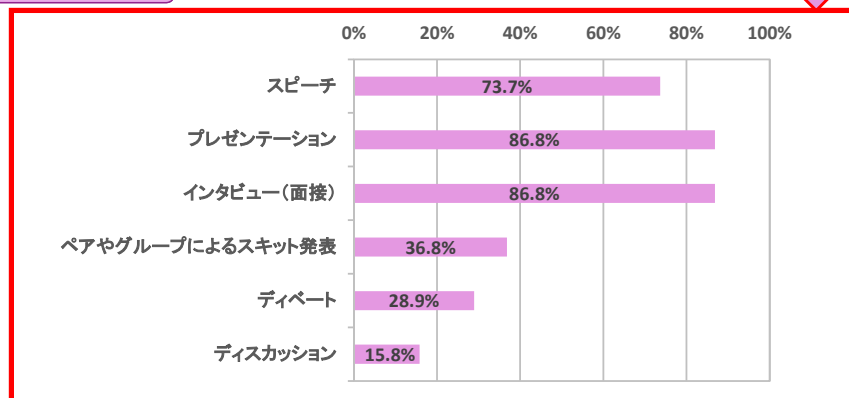
高等学校の研究校における評価方法の工夫・改善(案)

- パフォーマンス評価を実施している研究校のうち、88.4%でスピーキングテストを実施。
- スピーキングテストでは、プレゼンテーション(86.8%)、インタビュー(面接)(86.8%)、スピーチ(73.7%)を実施。
- ライティングテスト(エッセイ・ライティング等)では、67.4%でライティングテストを実施。

Q.パフォーマンス評価を実施した場合、具体的にどのような評価を行っているか



スピーキングテストの内容



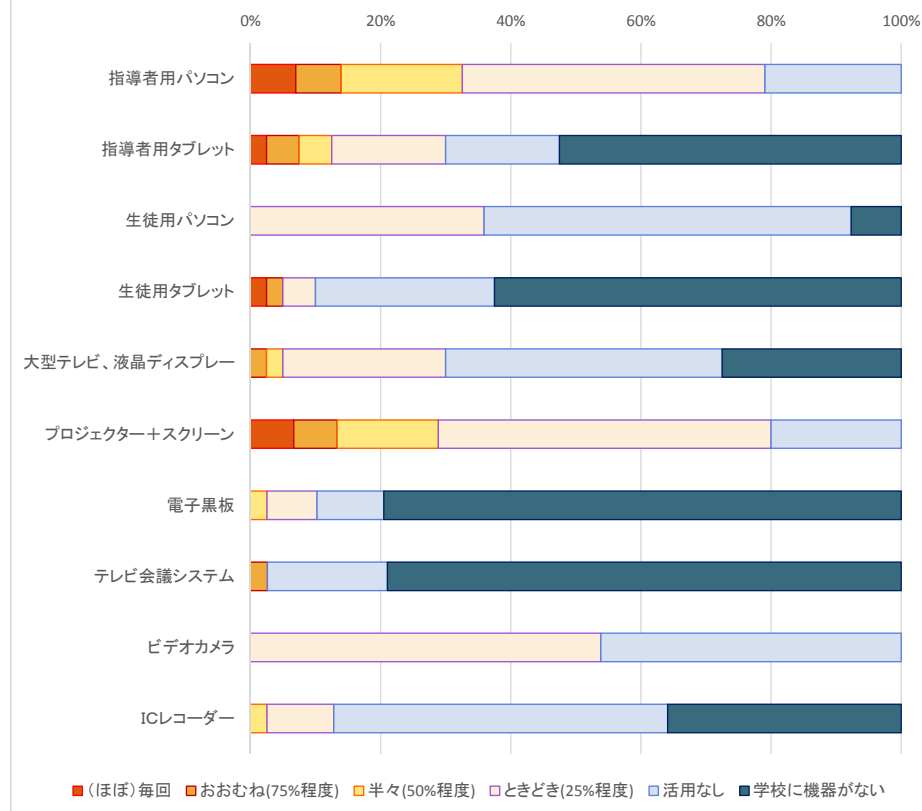
パフォーマンス評価の実施方法

- 単元ごとの小パフォーマンス評価では、ルーブリックを使って生徒による自己評価及び相互評価を実施。加えて、年4回実施の定期試験の一部として実施するパフォーマンス評価では英語担当教員とALTが協同で評価する。
- 定期考査でライティングテストを実施し、学期に1回インタビュー・テストを実施している。
- 1年生では、年間10回程度スピーチやプレゼンテーション等の発表を行わせ評価を行う。評価の比重は成績の40%程度。

高等学校の研究校におけるICTの活用①(案)

- 指導者用パソコンを活用している研究校は79.0%、指導者用タブレットを活用している研究校は30.0%。
- 生徒への提示方法としては、大型テレビや液晶ディスプレイ(30.0%)、プロジェクター+スクリーン(80.0%)が活用されている。
- 生徒用タブレットや指導者用タブレット、電子黒板、テレビ会議システム等が整備されていない学校が多い。

授業で活用しているICT機器等とその頻度



高等学校の研究校でのICTの活用② (案)

- 指導者用パソコン等を使った教材や資料の提示による生徒の学習内容の理解を助ける取組や、ビデオカメラをパフォーマンス評価に活用する取組が見られる。

〈ICT機器等の活用例・効果〉

○指導者用パソコンやタブレットで、扱う題材に関連した画像や動画等の資料、デジタル教材を提示。

- 視覚に訴えることで、日本語を使うことなく、生徒の理解を助けることができる。
- 生徒が課題を把握しやすくなる。
- 効率的に教材提示ができることで、言語活動の時間を多く確保できる。
- 作成した教材を教員間で共有することが可能。

○生徒用パソコンを生徒の個別学習に活用。

- 生徒が、必要な情報やデータを即座に調べることができる。
- 生徒自身が発表資料を作成することで、プレゼンテーション力を高めることができる。
- 生徒の興味や習熟度に応じた教材を個別に選択、活用することができる。

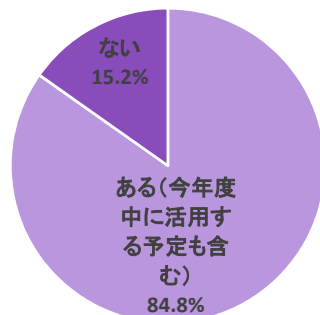
○ビデオカメラを使って、スピーチやプレゼンテーション、インタビュー等を録画。

- 生徒のパフォーマンスを記録することで、評価に活用できる。
- 生徒自身が自分のパフォーマンスを客観的に見ることで、改善につなげることができる。

高等学校での外部試験等の活用

- 84.8%の研究校で、生徒の英語力を定量的に測るために外部試験等を活用している。

Q.生徒の英語力を定量的に測るために、外部試験等を活用したことがあるか？



〈外部試験等の活用例〉

- GTEC for STUDENTSのトータルスコアの経年比較で、H27年度卒業生は、289(1年生)→346(2年生)→371(3年生)と着実にスコアを伸ばした。
- ライティングに関わるパフォーマンステストを年間で複数回実施。GTECのライティングのスコアが上昇。

平成28年度 英語教育強化地域拠点事業の小学校「活動型」「教科型」における指導・活動・教材用チェックリストの結果概要(案)

1. 調査の目的

- 英語教育強化地域拠点における研究の現状を把握し、成果や課題を分析した上で関係者が情報を共有し、強化地域拠点や研究校の今後の研究の充実に資する。
- 具体的な取組の状況について調査し、次期学習指導要領の改訂及び新教材の作成の参考とする。

2. 調査の対象・期間

- 調査対象
英語教育強化地域拠点事業 研究校（小学校116校）
- 調査期間
平成28年6月24日～平成28年7月29日
- 主な調査項目
「活動型（中学年）」及び「教科型（高学年）」の各指導における教材（テキスト・デジタル教材・ワークシート等）の活用に関すること

3. 「活動型」（中学年）の主な調査結果

◆教材について

- 小学校中学年の「活動型」では、**Hi, friends! 児童用テキストとデジタル教材、独自教材が多く活用**されている。絵本教材は、絵本を扱う単元で活用されている。
- **独自教材は、Hi, friends!の絵を使って作成した「掲示用絵カード」や「ワークシート」、「児童用カード」が多く活用**されている。市販教材は「歌・チャンツ」や「絵本」に関するものが多い。
- Hi, friends!デジタル教材に収録されている**チャンツは、児童にとって覚えやすく、時間が経っても覚えている**ことが多い。
- 新しい表現を導入する際、**絵本を活用することにより、その表現の音声とともに、それがどのような意味をなすか、児童が理解しやすい**。また、絵本により文字に見慣れるという効果も見られる。
- 日本と外国で文化の違いや共通点があることを知るために、**Hi, friends!デジタル教材に外国の生活の様子に関する動画や画像等の実際の様子があるのがよい**。
- Hi, friends!は5・6年生向けに作成されていることから、3・4年生に合わない語彙や表現もある。

◆指導について

(1)積極的にコミュニケーションを図るための指導について

- 学級担任が英語を用いて**ロール・モデル**となったり、**ALTとのチーム・ティーチングでデモンストレーション**を見せることで、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度につながっている。
- デモンストレーションを丁寧に行わないと、児童が理解できなかつたり混乱したりすることがある。デモンストレーションをスモールステップで行うことが必要。

(2)日本と外国の言語や文化について、体験的に理解を深める指導について

- ALTや、デジタル教材等を活用して外国の言語や文化を紹介する活動が有効。
- 学級担任が授業で英語を使うときにカタカナ英語になることも多い。**毎時間使う指示やほめ言葉などの教室英語については、ブラッシュ・アップが必要**。

4. 「教科型」（高学年）の主な調査結果

◆教材について

- 小学校高学年の「教科型」では、**Hi, friends! 児童用テキスト・デジタル教材、Hi, friends! Plus ワークシート・デジタル教材に加え、独自教材が多く活用**されている。
- **独自教材は、Hi, friends!及びHi, friends! Plusのワークシートを活用した「ワークシート」や「掲示用絵カード」、「児童用カード」が多く活用**されている。
- Hi, friends! Plusのデジタル教材収録の「**アルファベットの書き方**」は、**音声を大いにしながら文字の認識を深めるために効果的**。また、「文字当てパズル」や「懐中電灯」などの活動は、文字の形や大きさに着目させるために効果的。
- チャンツやジングル、歌などで自然と英語の音声やリズムを身に付ける活動を継続して行うことで、英語の音声に対する認識が深まっている。
- 掲示用絵カードや児童用カード等に絵と文字があることで、児童は常に文字を目にすることができ、文字に見慣れたり文字と絵（意味）を一致させたりすることができる。
- デジタル教材や絵カード、ワークシートなど、**児童に文字を提示する場合は、常に4線に表示すること、ブロック体で表示すること（フォントの違いに注意）が必要**。

◆指導について

(1)アルファベットの文字の認識を深める指導について

- 文字を仲間分けさせたり、一部を隠して表示したりして、**文字の形や高さに着目させる様々な活動を行うことで、アルファベットの文字の認識を深める**ことができる。
- ローマ字と混同する児童、小文字の認識（b, d, p, qの違いなど）に難しさを感じる児童が見られる。**国語科におけるローマ字指導の在り方についても検討が必要**。

(2)単語の認識を深める指導について

- **十分に聞いたり話したりした活動の後に、それらの単語を読んだり書いたりする活動を行う**ことで、音声と文字を一致させながら単語の認識を深めさせることができる。
- アルファベット1文字ずつの認識ができて、それが単語になると視覚的に捉えることが難しい児童もいることから、**特別支援の視点を取り入れた指導や支援が必要**。

(3)日本語と英語の音声の違いやそれぞれの特徴への気付きを促す指導について

- 国の名前や果物、スポーツなど、**身の回りで日本語でカタカナ表記されている英語は、日本語と英語の音声の違いに気付かせるために有効**である。
- 国語科と関連を図り、日本語と英語の音声の違い等について指導することが必要。

(4)日本語と英語の語順の違いなど文構造への気付きを促す指導について

- 「主語＋述語＋目的語」の文型を用いて、**英語の文と日本語の文を掲示して比較**させたり、**主語・述語・目的語・疑問詞などで色分けした文字カードを掲示**したりすることで、文構造を視覚的にとらえやすく工夫した。
- 文構造の違いに気付かせるための具体的な指導方法、評価方法について研究が必要。

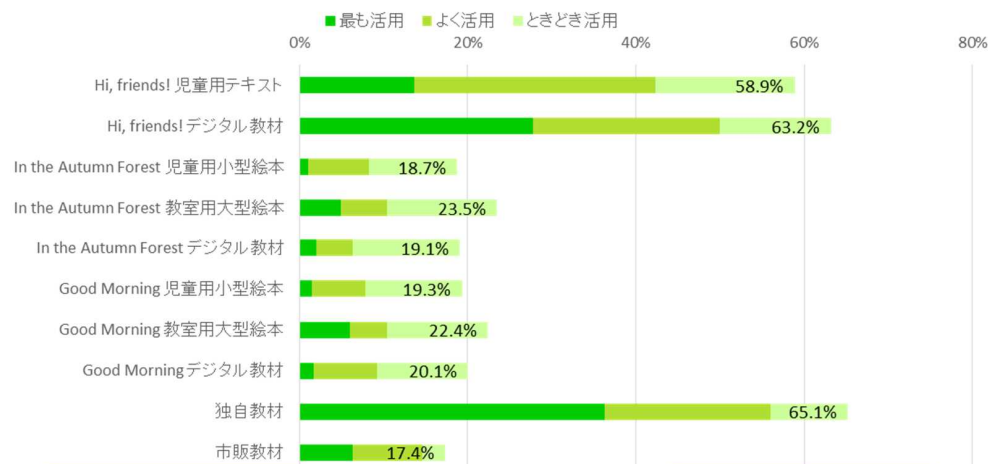
(5)定着を目指した指導について

- **授業の最初に前時までの復習をする時間を設定**したり、**既習の表現や単語を使ったペア・ワーク等**を取り入れたことで、定着が進んだ。
- 定着を目指して語彙や表現を繰り返す活動では、児童の意欲が減退しないように活動内容に変化をもたせたりレベルを調整したりするなどの工夫が必要。

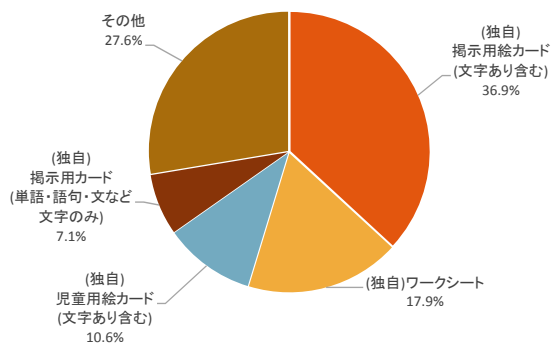
小学校中学年「活動型」で活用した教材

- 小学校中学年の「活動型」では、Hi, friends!児童用テキストとデジタル教材、独自教材が多く活用されている。絵本教材は、絵本を扱う単元で活用されている。
- 独自教材は、Hi, friends!の絵を使って作成した「掲示用絵カード」や「ワークシート」、「児童用カード」が多く活用されている。
- 市販教材は「歌・チャンツ」や「絵本」に関するものが多い。

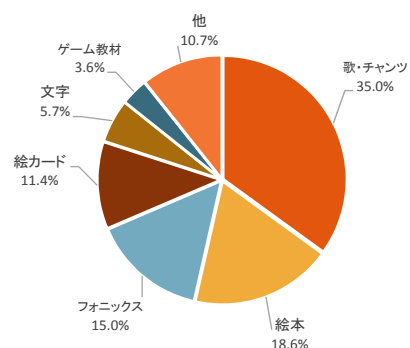
Q.小学校中学年「活動型」で活用した教材とその頻度（総計）



独自教材の内容



市販教材の内容

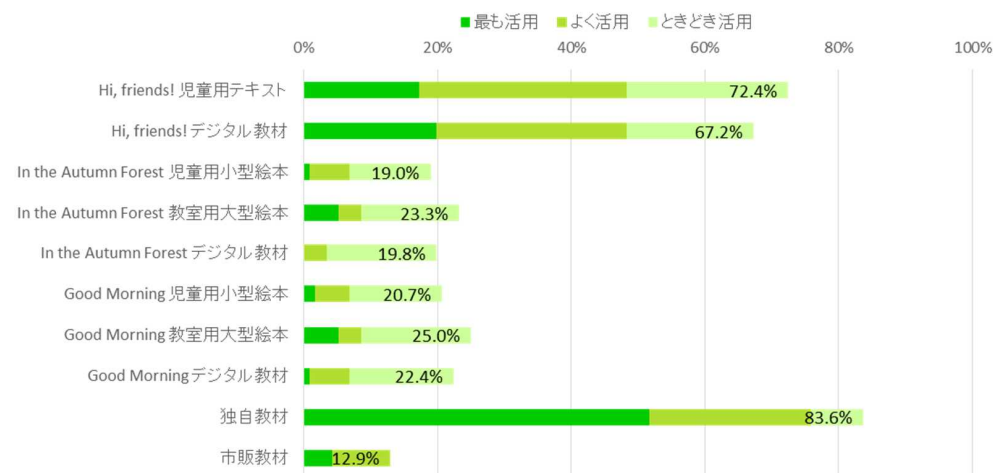


小学校中学年「活動型」

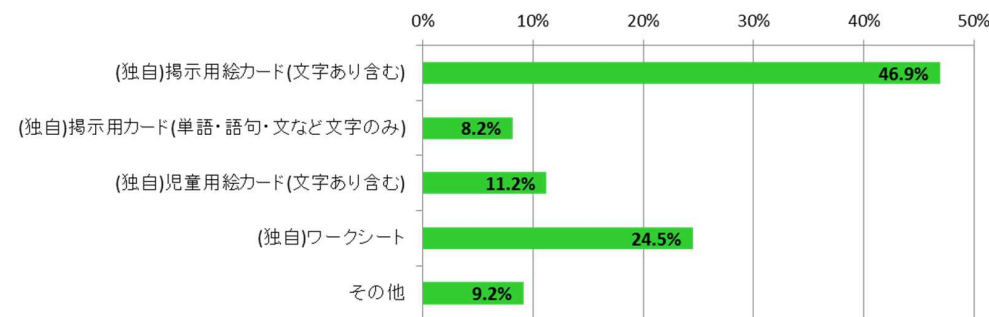
①積極的にコミュニケーションを図るための指導

(1) 外国語を用いてコミュニケーションを図るための指導

活用した教材とその頻度



独自教材の内容

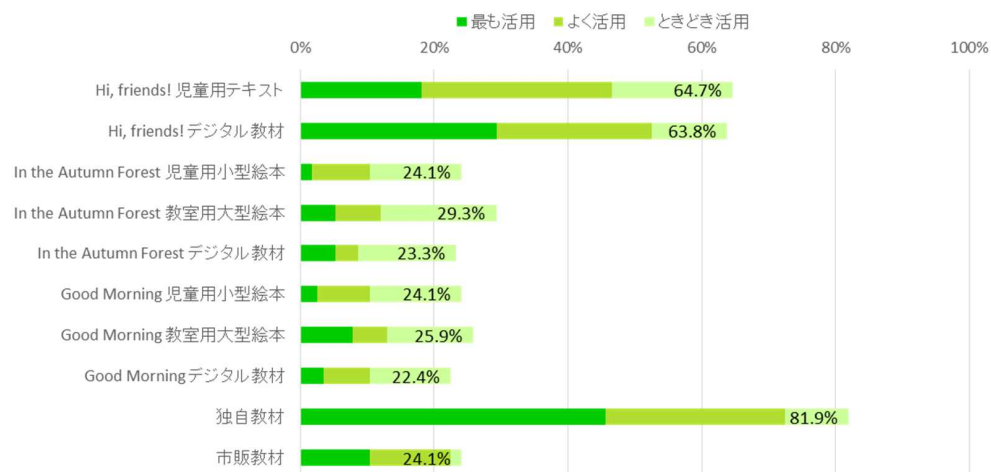


小学校中学年「活動型」

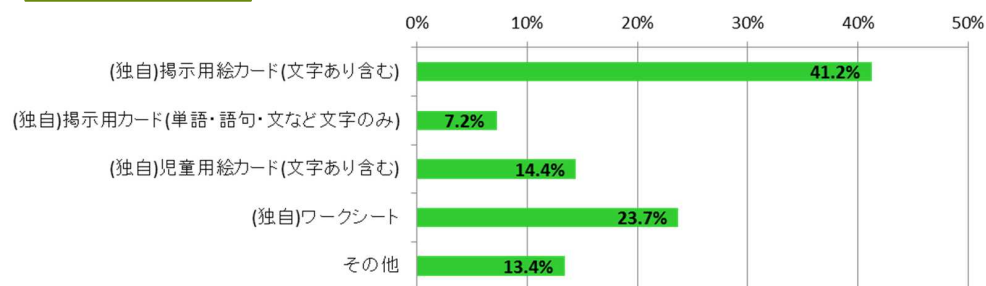
①積極的にコミュニケーションを図るための指導

(2) 積極的に外国語を聞いたり、話したりする

活用した教材とその頻度



独自教材の内容

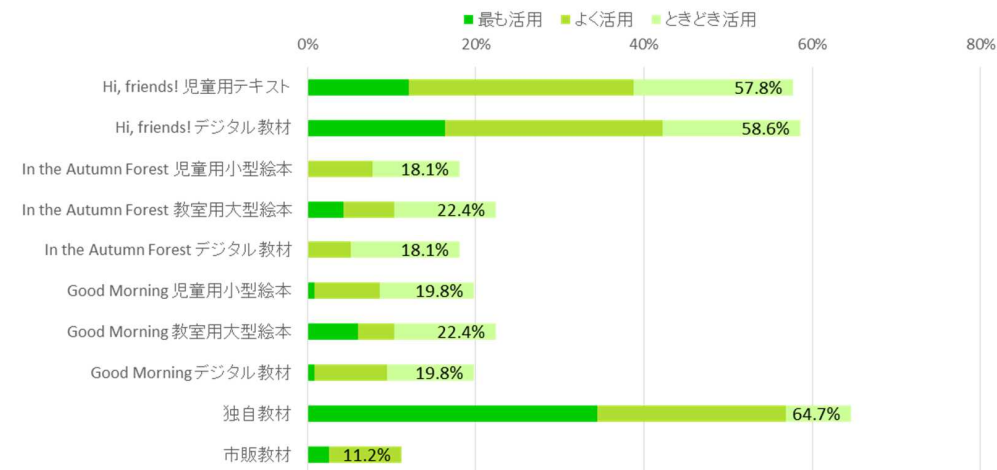


小学校中学年「活動型」

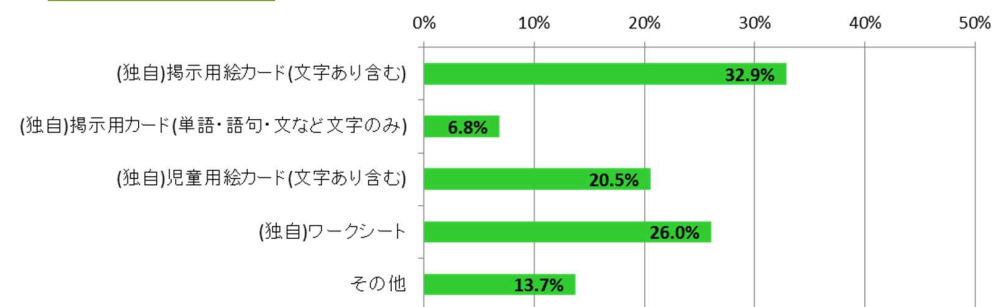
①積極的にコミュニケーションを図るための指導

(3) 言語を用いてコミュニケーションを図ることの大切さを知る

活用した教材とその頻度



独自教材の内容

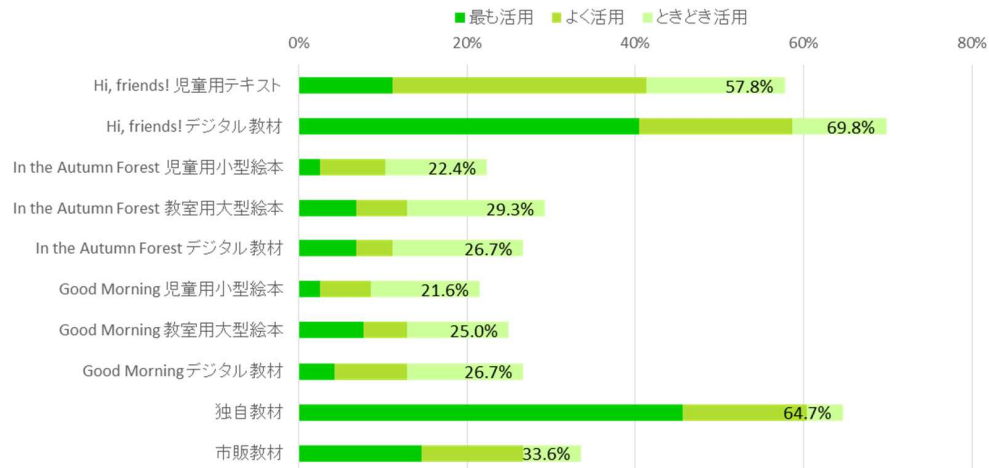


小学校中学年「活動型」

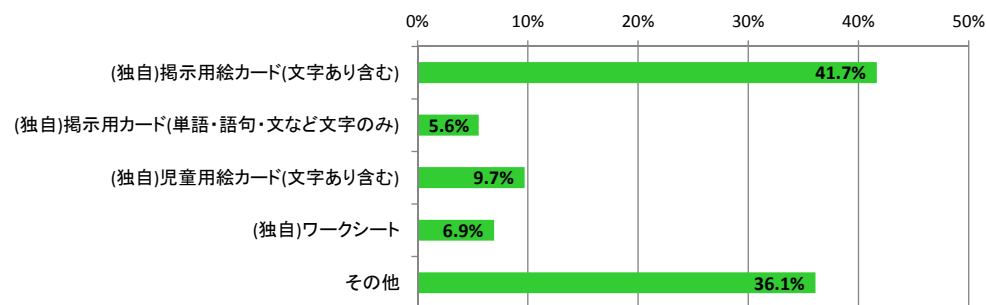
②日本と外国の言語や文化について、体験的に理解を深める指導

(1) 外国語の音声やリズムなどに慣れ親しむ

活用した教材とその頻度



独自教材の内容

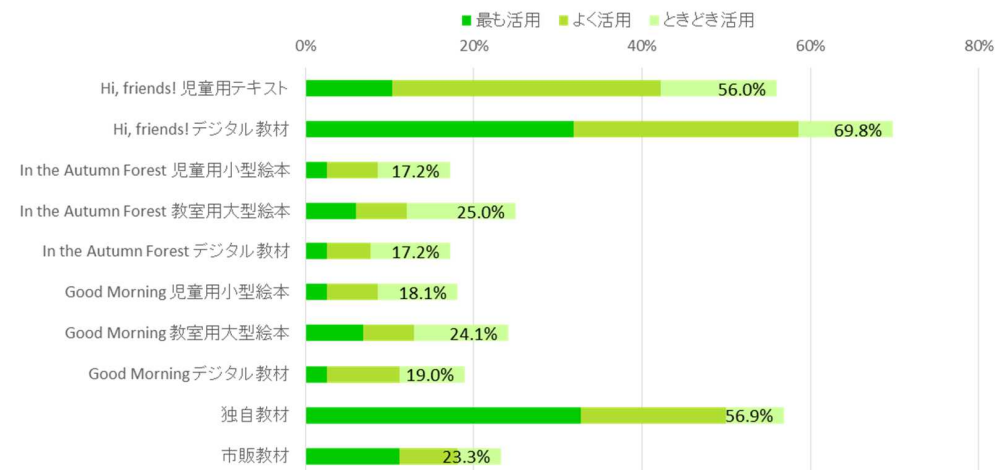


小学校中学年「活動型」

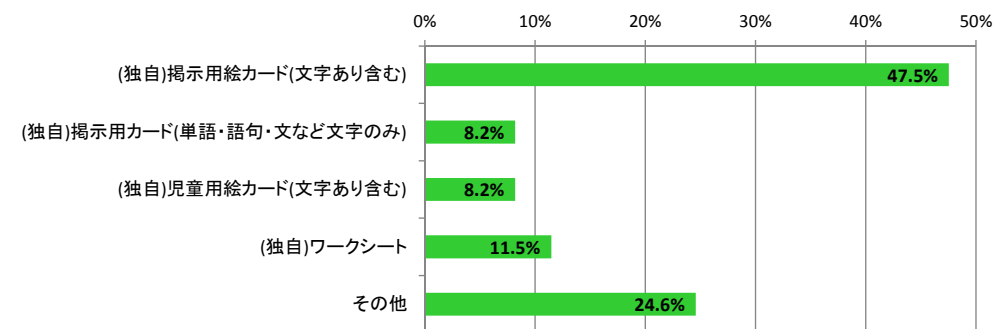
②日本と外国の言語や文化について、体験的に理解を深める指導

(2) 日本語との違いを知り、言葉の面白さや豊かさに気付く

活用した教材とその頻度



独自教材の内容

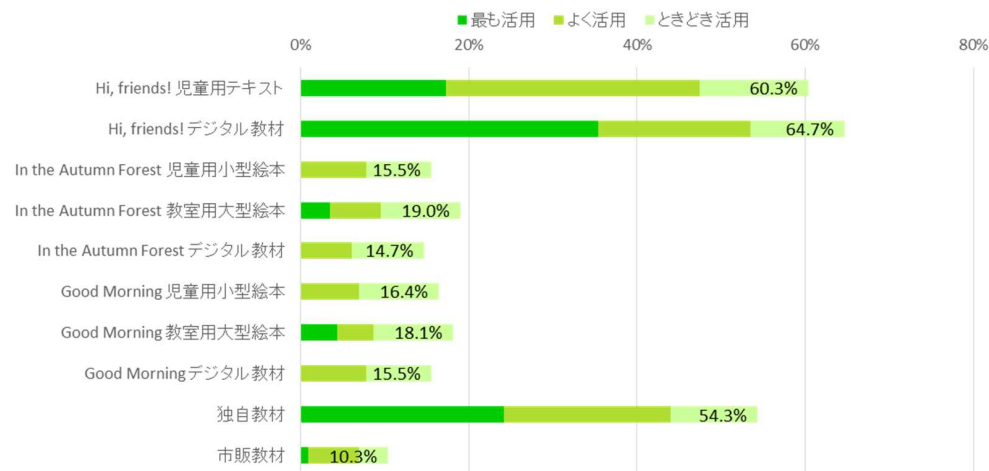


小学校中学年「活動型」

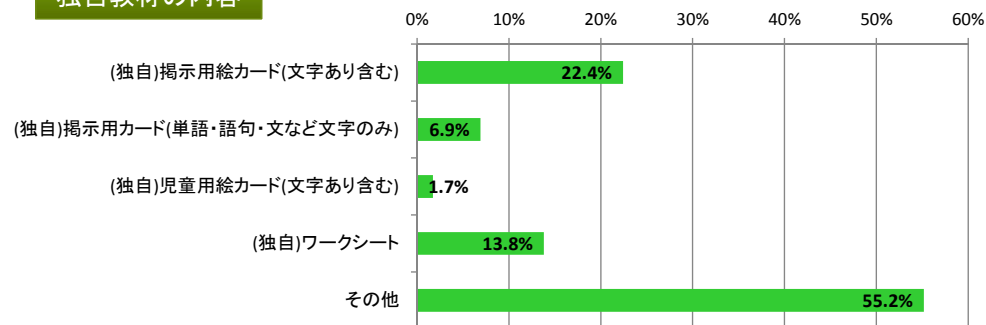
②日本と外国の言語や文化について、体験的に理解を深める指導

(3) 日本と外国との生活、習慣、行事などの違いを知り、多様なものの見方や考え方があることに気付く

活用した教材とその頻度



独自教材の内容



【その他の内容】

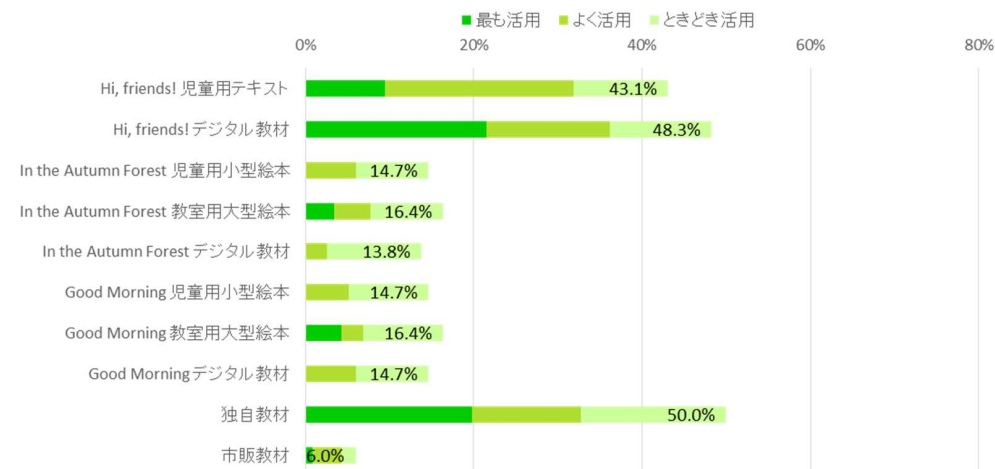
- ・ALTの母国について写真等で紹介するパワーポイント資料。
- ・写真や動画を使って外国の生活の様子を紹介。
- ・海外旅行の写真等を活用して教材としてスライドにまとめて提示。

小学校中学年「活動型」

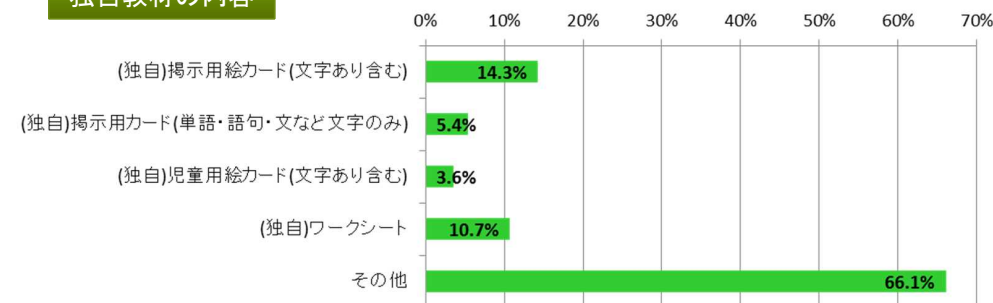
②日本と外国の言語や文化について、体験的に理解を深める指導

(4) 異なる文化を持つ人々との交流等を体験し、文化等に対する理解を深める

活用した教材とその頻度



独自教材の内容



【その他の内容】

- ・ALTやCIRによる母国紹介のプレゼンテーションや交流会。
- ・中学生の海外派遣事業の報告会を映像で視聴。
- ・海外の姉妹校の児童との交流会で、互いに生活を紹介するプレゼンテーションを実施。

小学校中学年「活動型」における指導と教材の成果・課題（自由記述より）

中学年「積極的にコミュニケーションを図るための指導」における成果と課題

指導について

- 学級担任ができるだけ英語を用いて児童のロール・モデルとなることで、児童は英語を身近に感じ、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度につながった。
- ALTとのチーム・ティーチングでデモンストレーションを見せることで、児童にコミュニケーション場面を具体的にイメージさせることができた。また、日本語での説明をせずに済んだ。
- 使用表現の必要感が生じるような場面設定を工夫したことで、児童のコミュニケーションへの意欲を高めることができた。
 - デモンストレーションを丁寧に行わないと、児童が理解できなかつたり混乱したりする様子が見られた。指導者同士、指導者と代表児童、児童同士というように、デモンストレーションをスモールステップで行うことが必要。
 - 児童が言葉を自己選択してコミュニケーション活動を行うためには、ある程度単語の数を増やす必要があるが、たくさんの単語を扱うと児童の負担感が大きくなる。児童の様子を見ながら、徐々に単語を増やしていくことが必要。

教材について

- Hi, friends! デジタル教材に収録されているチャンツは、児童にとって覚えやすく、時間が経っても覚えていることが多い。
- 新しい表現を導入する際、絵本を活用することにより、その表現の音声とともに、それがどのような意味をなすか、児童が理解しやすい。また、絵本により文字に見慣れるという効果もある。
- 4年生向けの絵本教材「Good Morning」は、絵の中に様々な仕掛けがあるので、一日の生活や動作に関する表現だけではなく、「Where」や「How many」など様々な表現に慣れ親しませるのに有効。
- 文科省配布の絵本を活用し、単元のゴールとして子ども自身が家庭で読み聞かせをする学習を行ったことで、児童の意欲向上につながっただけでなく、英語教育に対する保護者の理解も得られた。
 - 5学年向けに作られているHi friends!について、中学年にも使用できる場所はどこか見極めることが必要。
 - 児童にとって普段の生活に出てこない単語を多く扱うと、学習意欲も下がる。児童の実態把握に基づいて言語材料を選ぶことが必要。
 - 絵本は、たくさんの語彙や表現が出てくるために、「全て理解して覚えて言えなければならない」という負担感を感じてしまう児童もいることに留意することが必要。

小学校中学年「活動型」における指導と教材の成果・課題（自由記述より）

中学年「日本と外国の言語や文化について、体験的に理解を深める指導」における成果と課題

指導について

- 国語科との関連を図りながら、漢字やカタカナと英語を比較する言語活動を行ったことで、日本語と英語の双方に対する関心を高めることができた。
- 果物やスポーツなど、日本語と似た発音の英語を扱う際、児童に「日本語と似ているけれど違う」ことを意識させて注意深く聞かせることが有効。
- 文化については、ALTやCIRによる母国紹介が効果的。また、ALTから見た日本の良さや不思議なところを話してもらうことも有効。
- 毎時間、ALTが「スモールトーク」として季節や行事、週末の出来事等について英語で話す活動を設定。身近な話題を取り上げることで、児童が興味をもって英語を聞くことができています。
 - 「lとr」や「bとv」の音の違いなど、英語の専門性が必要とされる場面は、指導の難しさを感じる。専門的な知識が乏しい小学校教員がどのように指導すればよいのか、指導技術を身に付けることが課題。
 - 学級担任が、授業で英語を使うときにカタカナ英語になってしまうことが多い。毎時間使う指示やほめ言葉などの教室英語については、教員の英語力をブラッシュ・アップすることが必要。

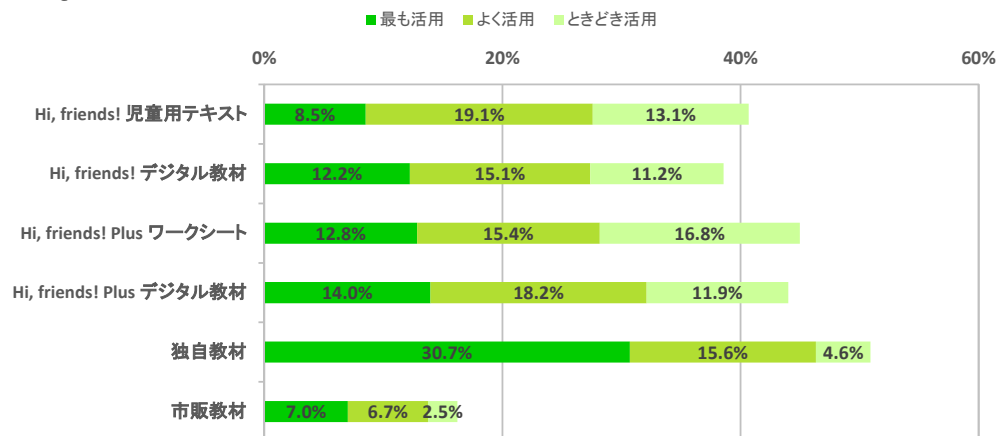
教材について

- Hi, friends! デジタル版に収録のチャンツが、日本語とは違う英語のリズムやイントネーションを自然に繰り返させるために効果的。
- 日本と外国で文化の違いや共通点があることを知るために、Hi, friends! デジタル教材に動画や画像等の実際の様子があるのがよい。
- Hi friends! 1のデジタル版に収録されている「世界の子どもの挨拶」の映像は、中学年の外国語活動の導入期において、英語を学習する意欲付けに非常に効果的。
- 掲示用絵カードや児童用カードに絵だけでなく文字も一緒に印刷してあることで、児童がアルファベットや単語に見慣れることにつながった。
 - 中学年という発達段階では、音楽やリズムに乗せて英語を聞かせたり言わせたりすることが有効であり、そのための歌やチャンツの教材が豊富にあるとよい。（市販教材で補っている。）
 - 児童の興味に応じて資料提示するために、他国の文化の映像や写真を豊富に収録した教材があるとよい。特に、他国の学校生活の様子を紹介する動画は児童の興味が深い。
 - デジタル教材をただ見せるのではなく、集中して英語の音声を聞かせるための活用の工夫が必要。

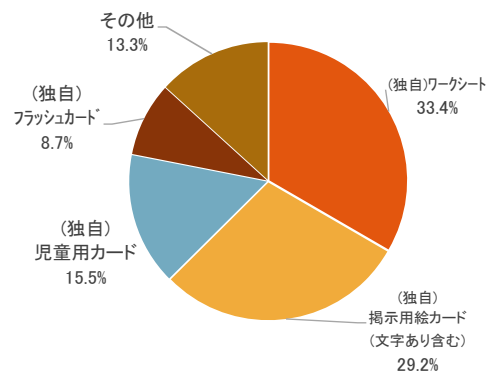
小学校高学年「教科型」で活用した教材

- 小学校高学年の「教科型」では、Hi, friends! 児童用テキスト・デジタル教材、Hi, friends! Plus ワークシート・デジタル教材に加え、独自教材が多く活用されている。
- 独自教材は、Hi, friends! 及び Hi, friends! Plus のワークシートを加工したり画像を使ったりして作成した「ワークシート」や「掲示用絵カード」、「児童用カード」が多く活用されている。

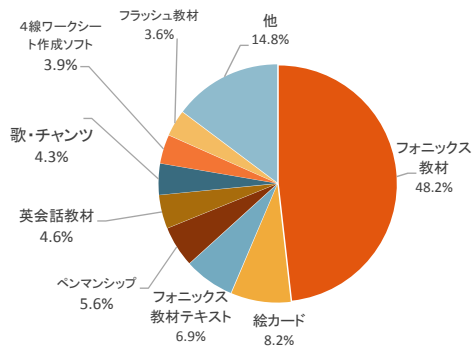
Q. 小学校高学年「教科型」で活用した教材とその頻度（総計）



独自教材の内容



市販教材の内容

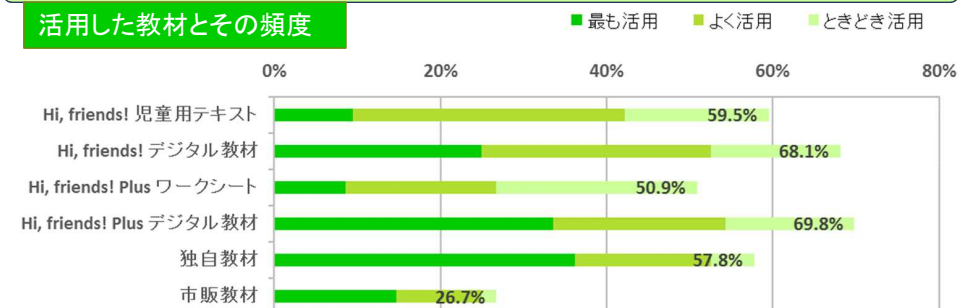


小学校高学年「教科型」

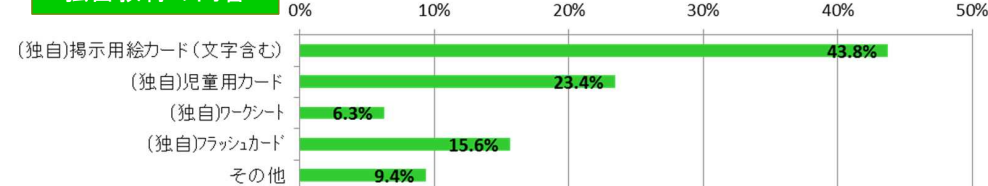
① アルファベットの文字の認識を深める指導

(1) アルファベットの発音をする

活用した教材とその頻度

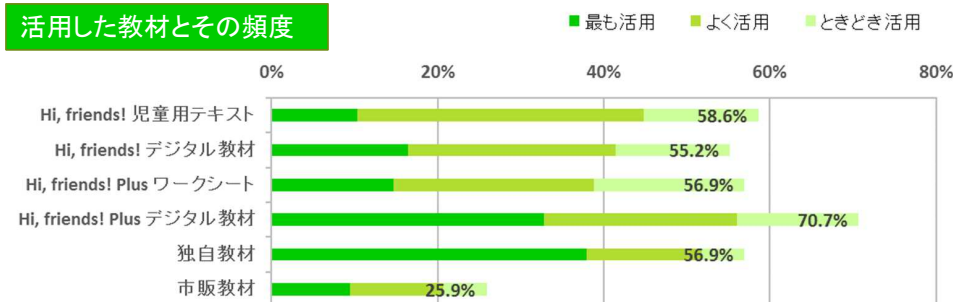


独自教材の内容

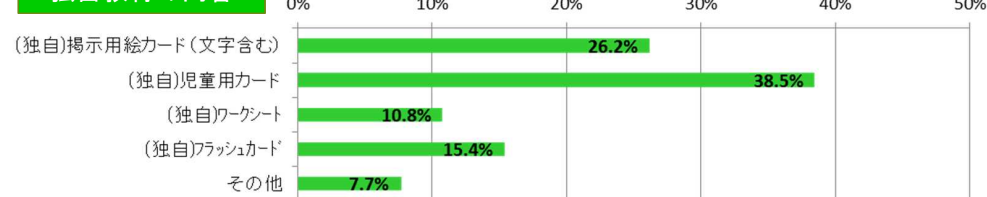


(2) アルファベットの文字と読み方を一致させる

活用した教材とその頻度



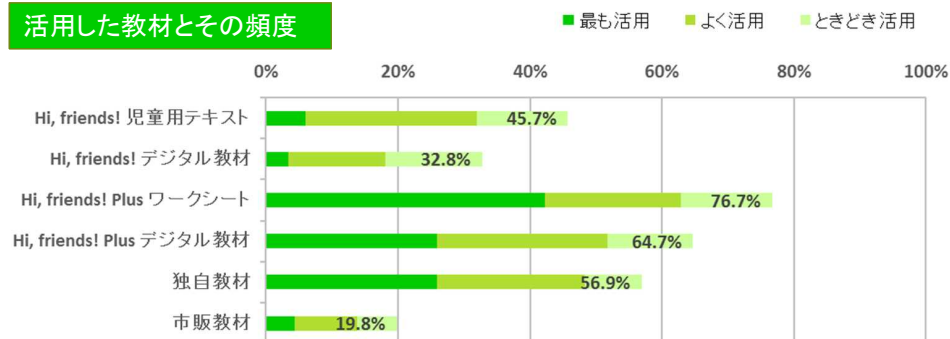
独自教材の内容



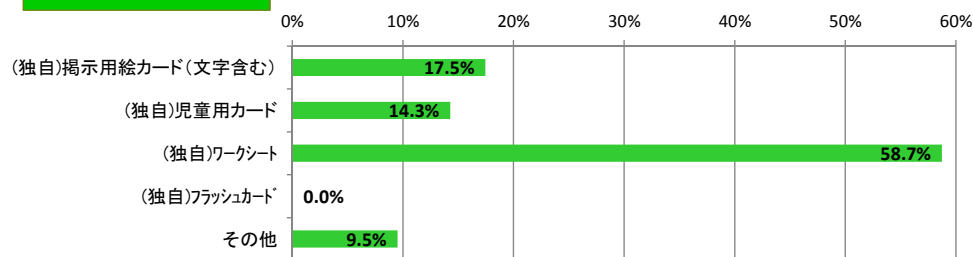
小学校高学年「教科型」 ①アルファベットの文字の認識を深める指導

(3) アルファベットの文字を書く

活用した教材とその頻度



独自教材の内容



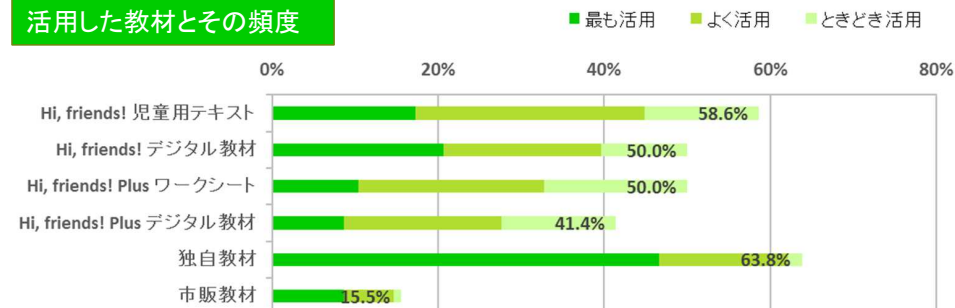
独自ワークシートの内容

- ・Hi, friends! Plusのワークシートを加工して作成。
- ・アルファベットの読み方、書き順を確認し、なぞり書きと写し書きをするワークシート。
- ・Hi, friends! Plusのデジタル教材・ワークシートで書き順の練習をした後、4線にアルファベットを丁寧に書く練習などに使用。
- ・その日の学習で扱ったアルファベットや単語を書くための4線のワークシート。
- ・Hi, friends! Plusのワークシートが早く終わった児童のためのワークシートを準備。
- ・県が作成したワークシートを活用。

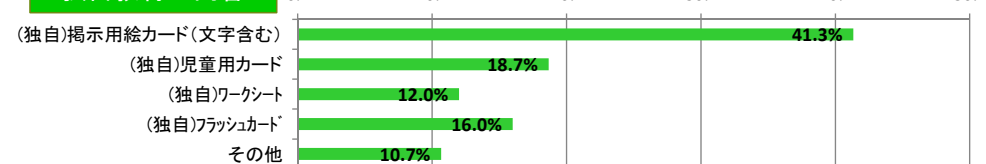
小学校高学年「教科型」 ②単語の認識を深める指導

(1) 単語に見慣れる

活用した教材とその頻度

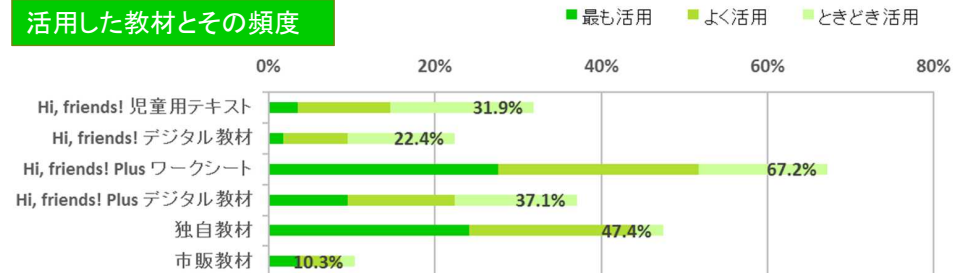


独自教材の内容

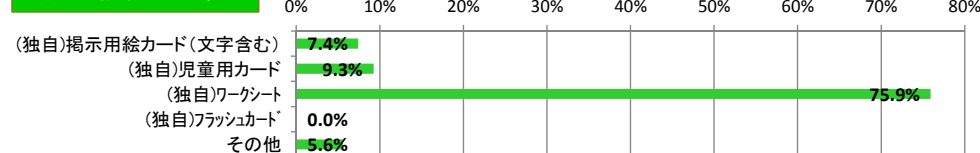


(2) 単語をなぞる

活用した教材とその頻度



独自教材の内容



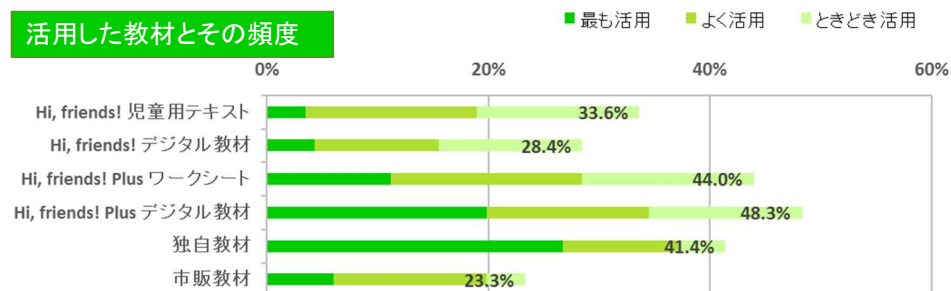
独自ワークシートの内容

- ・その日の学習で扱った単語をなぞるワークシート。
- ・聞いたり言ったりして慣れ親しんだ単語をなぞって書くワークシート。

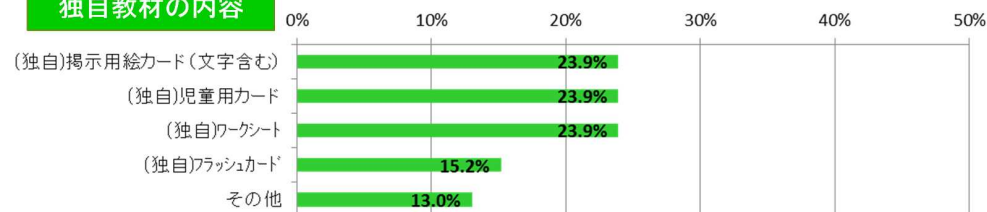
小学校高学年「教科型」 ②単語の認識を深める指導

(3) 英語において発音と綴りの関係を知る

活用した教材とその頻度

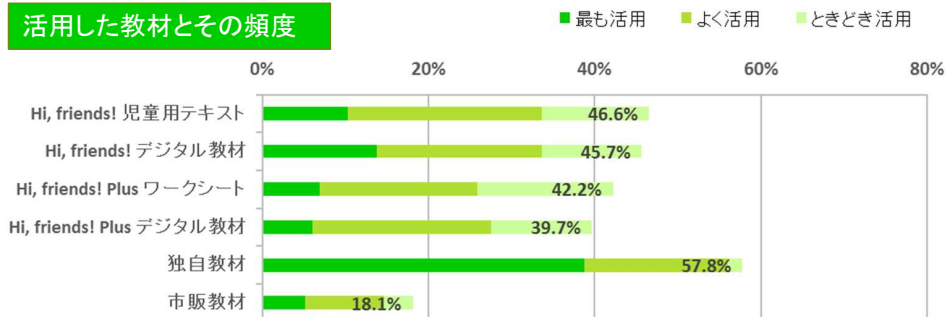


独自教材の内容

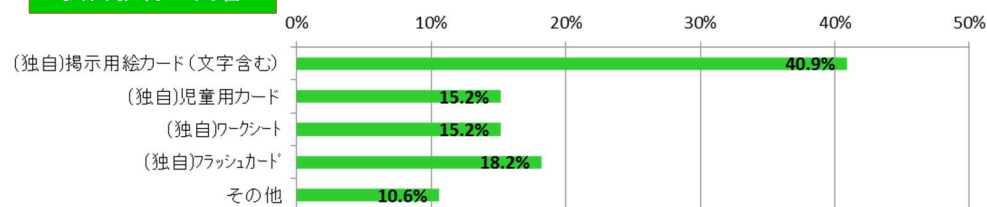


(4) 単語を読む

活用した教材とその頻度



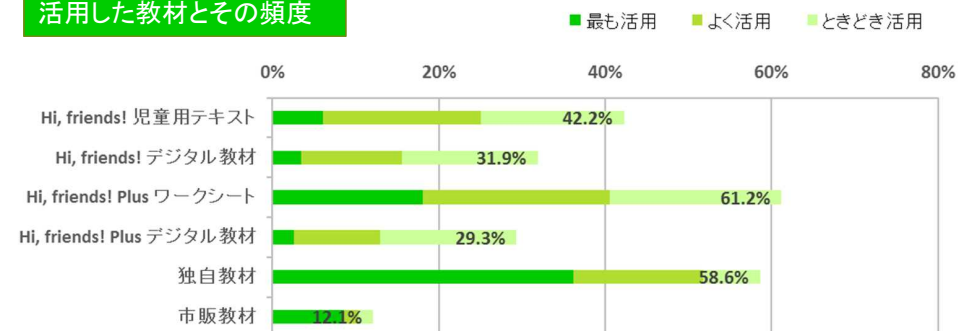
独自教材の内容



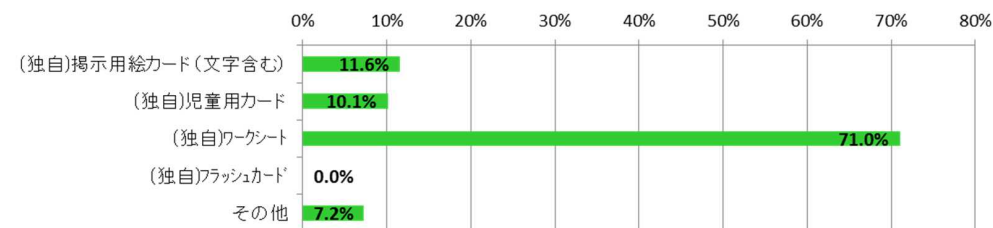
小学校高学年「教科型」 ②単語の認識を深める指導

(5) 単語を書き写す

活用した教材とその頻度



独自教材の内容



独自ワークシートの内容

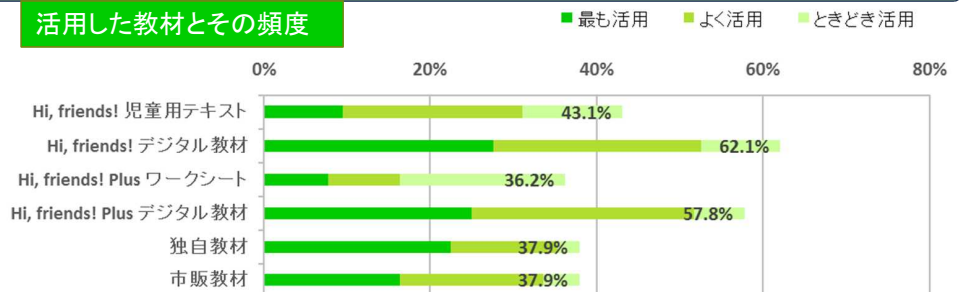
- ・表現活動との関連を重視し、自分の表現したいことを英語で書き写すワークシートを作成。
- ・Hi, friends! Plusのワークシートを加工して作成。
- ・単語をなぞり書きした後に、手本を見て書き写すワークシートを作成。
- ・単語の手本のすぐ下に写し書きするための4線を配置。
- ・ワークシートには単語の絵を入れて、児童がその音声を想起したり実際に口に出して言ったりしながら書き写すことができるようにしている。
- ・インタビュー活動で自分が答える単語や聞き取った単語を書き写すワークシートを作成。
- ・スピーチ活動で使う単語を書き写すワークシートを作成。

小学校高学年「教科型」

③日本語と英語の音声の違いやそれぞれの特徴への気づきを促す指導

(1) 音の違いに気付く

活用した教材とその頻度

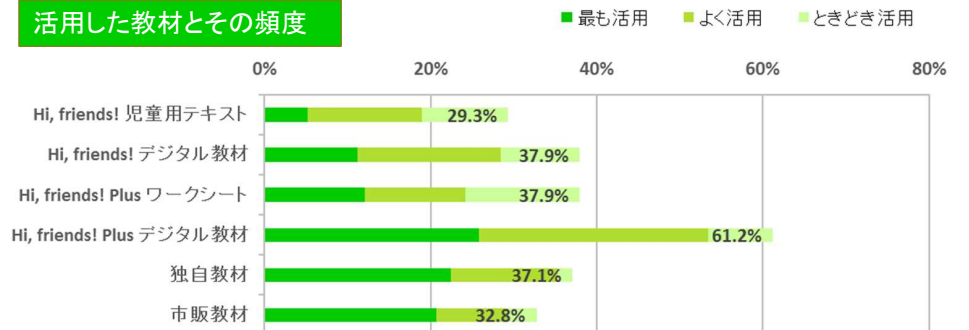


独自教材の内容

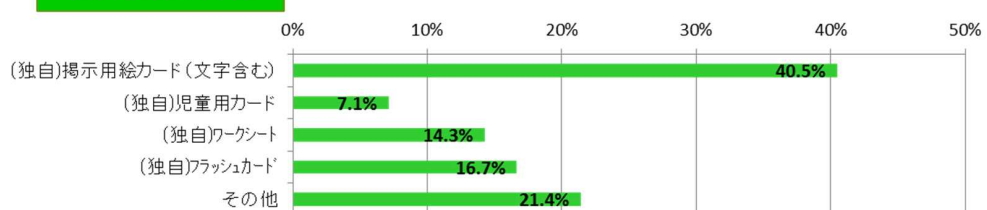


(2) アルファベットには読み方と音があることに気付く

活用した教材とその頻度



独自教材の内容

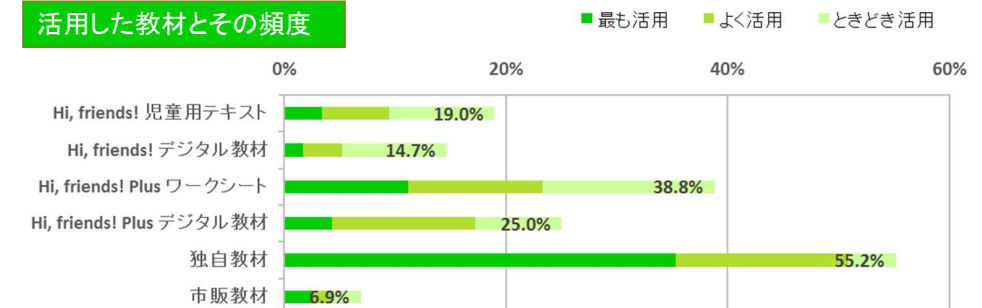


小学校高学年「教科型」

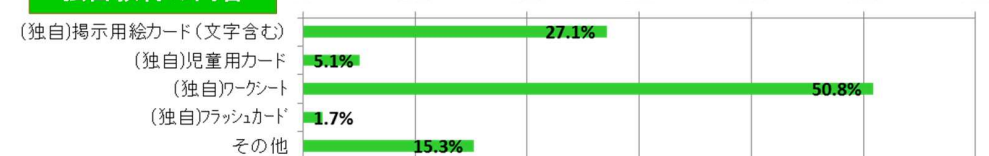
③日本語と英語の音声の違いやそれぞれの特徴への気づきを促す指導

(3) 英文を書く際には、単語と単語の間にスペースを置くことに気付く

活用した教材とその頻度

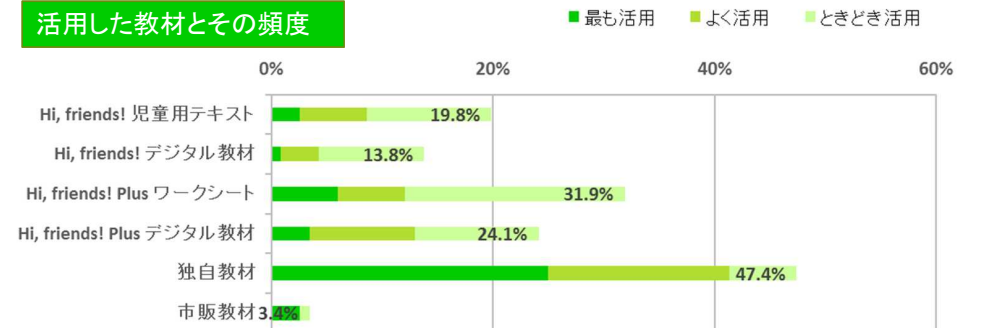


独自教材の内容

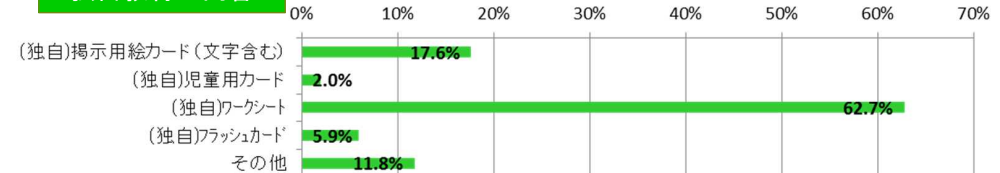


(4) 日本語と英語では、句読点やその打ち方に違いがあることに気付く

活用した教材とその頻度



独自教材の内容

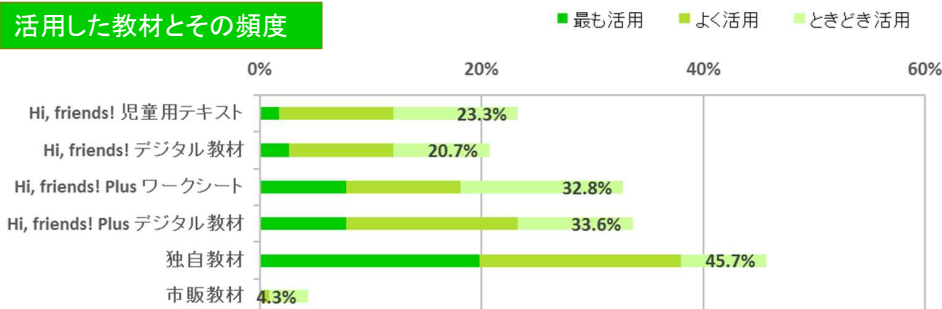


小学校高学年「教科型」

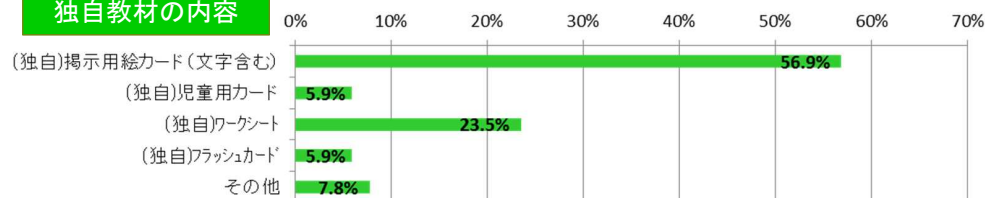
④日本語と英語の語順の違いなど文構造への気づきを促す指導

(1) 日本語と英語では語順（文構造）が違うことに気付く

活用した教材とその頻度

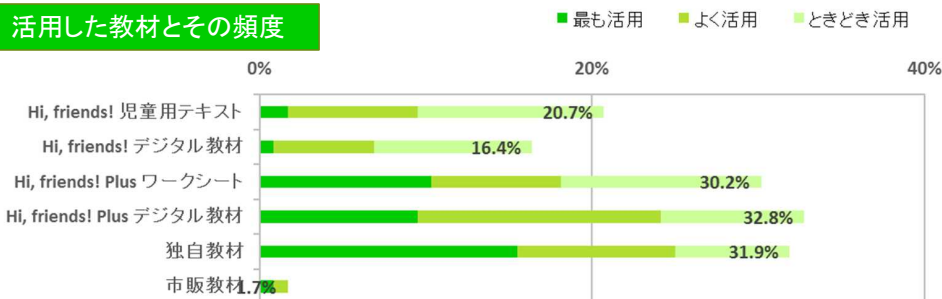


独自教材の内容

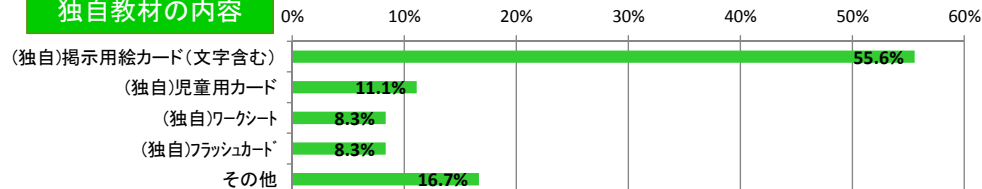


(2) 英語では、語順（文構造）によって意味が決まることに気付く

活用した教材とその頻度



独自教材の内容

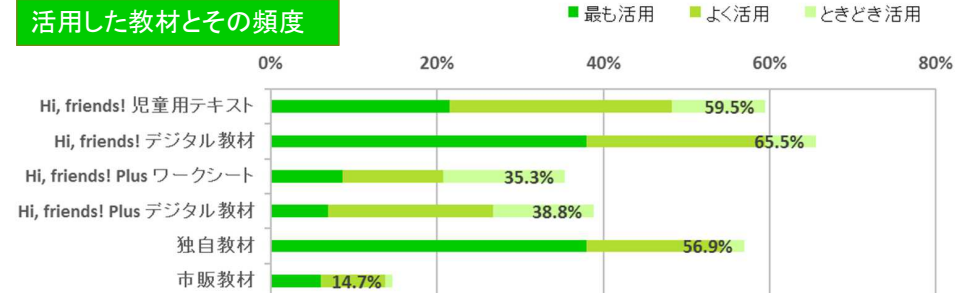


小学校高学年「教科型」

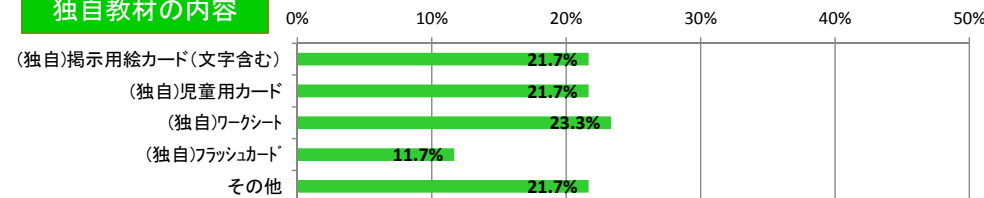
⑤定着を目指した指導

(1) 定着を目指し、語彙や表現などを繰り返し活用した言語活動をする

活用した教材とその頻度

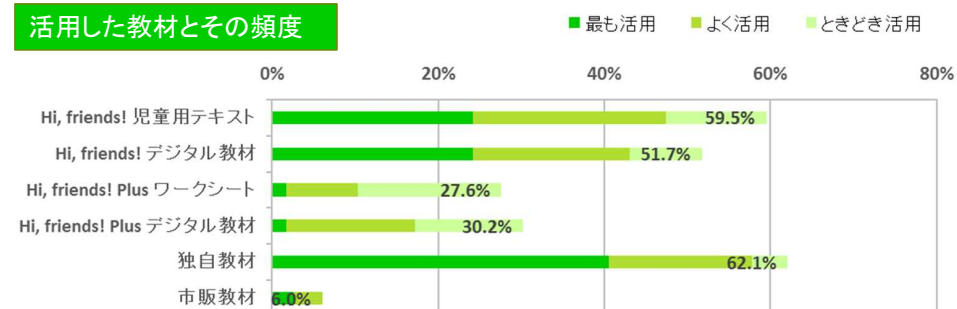


独自教材の内容

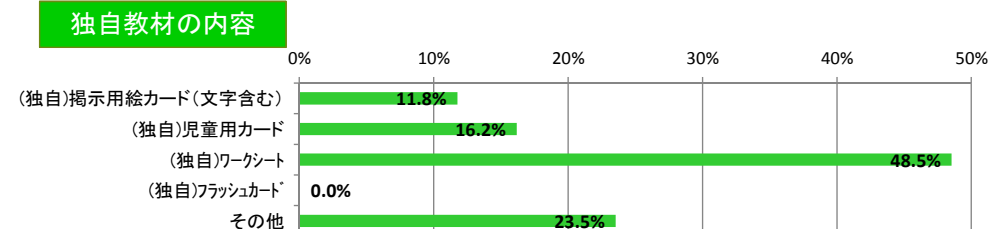


(2) 定着を目指し、自分の考えや気持ちなどを聞き手を意識しながら伝えようとするコミュニケーション活動をする

活用した教材とその頻度



独自教材の内容



小学校高学年「教科型」における指導と教材の成果・課題（自由記述より）

高学年「アルファベットの文字の認識を深める指導」における成果と課題

指導について

【成果】

- 3・4年生でアルファベットの文字カードを使ったカルタや人文字作りなど、文字に見慣れたり形を体感したりする活動を多く取り入れたことで、高学年においてアルファベットの文字への抵抗感が少なくなっている。
- 文字の形に着目して、様々な視点でアルファベットの文字を仲間分けさせる活動が、認識を深めさせるのに効果的。（直線だけ・曲線だけ・直線と曲線の組み合わせに仲間分け。大文字と小文字で似ているもの・似ていないものに仲間分け。小文字を2階建て・1階建て・地下1階建てに仲間分け等。）
- 4線黒板や4線上に文字を記した絵カード、ワークシート等を活用することで、文字の高さや大きさが違うことを常に意識させて指導した。
- 身の回りからアルファベットの文字を探す活動は、自然と文字を見比べることにつながることから、文字の認識を深めさせることに効果的。

【課題】

- ローマ字と混同する児童が見られるため、国語科におけるローマ字指導の在り方（ヘボン式の指導も含めて）も同時に整理して考える必要がある。
- 大文字に比べて、小文字の認識（高さの違い、b, d, p, qの違い、iとlの違いなど）に難しさを感じる児童が多い。

教材について

【成果】

- Hi, friends! Plusのデジタル教材収録の「アルファベットの書き方」は、音声を大事にしながらか文字の認識を深めることに効果的。
- Hi, friends! Plusのデジタル教材収録の「文字当てパズル」や「懐中電灯」などの活動は、文字の形や大きさに着目させることに効果的。
- アルファベットジングルを毎時間行うことで、児童は文字と音の関係に自然と気付く児童が多かった。
- Hi, friends! 巻末の児童用カードは、児童一人一人が文字への認識を深めるために必要である。様々なゲームに用いるだけでなく、日常的に児童が目に触れたり操作したりすることが可能。

【課題】

- 児童の目に触れる文字は、すべてブロック体に統一しておく必要がある。パソコンで独自にワークシートを作成すると、“a”や“g”などのフォントの設定に手間を要する。
- デジタル教材や絵カード、ワークシートなど、児童に文字を提示する場合は、常に4線の表示が必要である。

小学校高学年「教科型」における指導と教材の成果・課題（自由記述より）

高学年「単語の認識を深める指導」における成果と課題

指導について

【成果】

- 単元の初めはイラスト付きの英単語を使用し、慣れてきた頃に文字だけのカードを使用するなど、徐々に認識を深める提示の仕方を工夫した。
- 単元の第1～4時までに、十分に聞いたり話したりする活動を中心に行い、第5時以降に、それらの単語を読んだり書いたりする活動を中心に行うことで、音声と文字を一致させながら認識を深めさせることができた。
- コミュニケーション活動において、児童それぞれが自己表現に用いた単語を読んだり書いたりすることで、単語を書く必要感をもたせた。
- アルファベットの文字カードを並べ替えて3～5文字程度の単語を作る活動が、単語としての認識を深めることに役立った。

【課題】

- アルファベットの1文字ずつの認識ができて、それが単語というかたまりになると視覚的に捉えることが難しい児童もいる。特別な支援が必要な児童への支援方法を研究することが、全ての児童にとって有効な支援になる。
- 単語のなぞり書きや写し書きに要する時間は、個人差が大きい。また、一度に書く回数が多くなると、児童の意欲が減退する。

教材について

【成果】

- 絵の下に単語が書かれている掲示用絵カードを4種類用意（初めは絵が大きく文字が小さいが、徐々に文字が大きくなり絵が小さくなる）したことで、児童は自然と単語に対する認識を深めることができた。
- Hi, friends! に収録されている掲示用絵カード（文字入り）を縮小コピーして、児童用カードとして使用した。常に文字を目にする環境にすることで、児童は文字と絵（意味）を一致させることができた。
- 単元で繰り返し聞いたり言ったりした単語を扱うことによって、単元を通して単語のつづりを見慣れることができるだけでなく、それを読んだり書いたりする必要感が高まった。

【課題】

- 文字と音の関係を理解していない児童にとって、単語をなぞったり書き写したりする活動は学習意欲を低下させ、英語嫌いにつながる。音声面を重視するとともに、書く必要感をもたせることが必要である。
- 独自教材を開発する場合、どの単語をどの程度扱うのかという点で系統性を整理することが難しく、発達段階に合わないこともあった。

小学校高学年「教科型」における指導と教材の成果・課題（自由記述より）

高学年「日本語と英語の音声の違いやそれぞれの特徴への気付きを促す指導」
における成果と課題

指導について

【成果】

- 国の名前や果物、スポーツなど、日本語でカタカナ表記されている英語を扱うことは、日本語と英語の音声の違いに気付かせるために有効である。
- 国語科と関連を図り、国語科ではヘボン式ローマ字を教えることで日本語と英語でその音声の仕組みの違いについて知ることができた。
- 同じアルファベットの文字で始まる単語や、“-at”や“-ap”など同じ音を含む単語を集めることで、英語の音声の特徴に気付かせることができた。
- 音声のみで日本語と英語の違いに気付かせた後に、英語のつづりを見せることで、その規則性への理解を深めることにつながった。

【課題】

- 「単語を覚えたい。使いたい」という気持ちが高いからか、英語にカタカナで読み方を書いてしまう児童が何人かいた。児童の負担にならないように、扱う単語を限定することも必要である。
- アルファベットの文字が持つ音を小学校の担任が指導することは大変難しい。また、音からつづりを類推する活動は、様々なバリエーションがあるため、難しさを感じた。

教材について

【成果】

- Hi, friends! (デジタル教材) では、普段使っている言葉と英語の音の違いに気付かせる単語が多く含まれている。指導者が教材の意図を理解し、授業の中で気付かせるための活動を仕組むことが大切である。
- 毎回の授業でALTを活用できるわけではないので、英語の音声を繰り返し聞かせるためのデジタル教材は必須である。
- チャンツやジングル、歌などで自然と英語の音声やリズムを身に付ける活動を継続して行うことで、英語の音声に対する認識が深まっている。

【課題】

- 国語科の授業との関連について整理し、国語科の授業でどのような指導が必要か検討することが必要である。
- 日本語と英語の違いについて発達段階にあった教材があればと思う。「よく聞いて、まねしなさい」だけでは、英語の発音ができない児童もいる。
- Hi, friends! Plusのジングルでは、音声とともにアルファベットや単語の文字と一緒に表示されるバージョンがあると、より文字と音をつなぐことができると考える。

小学校高学年「教科型」における指導と教材の成果・課題（自由記述より）

高学年「日本語と英語の語順の違いなど文構造への気付きを促す指導」
における成果と課題

指導について

【成果】

- “I like ~.”のように「主語＋述語＋目的語」の文型を用いて、英語の文と日本語の文を掲示して比較させたことで、日本語と英語では目的語の位置がちがうことに気付かせることができた。
- 主語や疑問詞を表す掲示用絵カードを作成し、既存の動詞や名詞の絵カードと組み合わせて文構造の通りに掲示することで、聞いたり話したりしている英語を視覚的に理解させることができた。
- 単語で区切った単語カードを提示する際、主語・述語・目的語・疑問詞などで色分けし、視覚的に文における役割や位置に気付きやすくした。

【課題】

- 児童が文構造の違いに気付いているかどうかを見取ることが難しい。具体的な指導方法とともに評価の方法についても研究が必要である。
- 「単語の音の違いに気付くこと」から次のステップとして、いかに「短いまとまりのある表現」につなぐかが課題。コミュニケーション活動と関連させて、友達どうして「伝えたい」と思う場の設定を工夫する必要がある。
- 日本語の主語や述語、主語の省略といった国語科での指導事項が定着していないと、英語の文構造との違いを理解することは難しい。

教材について

【成果】

- 文字が書かれた絵カードを児童用カードとして配り、聞こえた英文に合わせて並び替える活動を取り入れた。文を書く活動は時間がかかるが、絵カードを並び替えるだけだと児童の負担感も少なく、いろいろな語順に気付かせることが可能。
- 「A letter to …」のように、繰り返しの表現が多い絵本を活用することが、自然と英語の語順に気付かせるために有効である。

【課題】

- 語順の違いに気付かせる指導をするための掲示用絵カードや文字カードの充実を望む。
- 絵本は、語順だけに限らず、音と文字の関係や単語の認識、意味理解などに効果的な教材であるため、児童一人一人が手にできるようにしてほしい。学校で児童数分をカラー印刷するのは経費上困難である。

小学校高学年「教科型」における指導と教材の成果・課題（自由記述より）

高学年「定着を目指した指導」における成果と課題

指導について

【成果】

- 授業の最初に前時までの復習をする時間を設定した。毎時間の最後には、定着を確かめるための活動を取り入れるとともに、単元の終末にはリスニングテストやスピーキングテストなどの評価活動を行った。
- 授業の冒頭部分にQ&Aを取り入れ、今まで学習した表現や単語を使ってペアやグループで対話する活動を継続したことで定着が進んだ。
- 短時間学習で、授業で行った活動をアレンジして実施することで使用表現や単語を毎日のように繰り返すことができ、定着につながった。
- 基本的な表現を機械的に繰り返すのではなく、児童が「伝えたいこと」に合わせて選んだ語彙を用いることで、児童の興味・関心を低下させることなく定着を図ることができた。

【課題】

- 定着を目指して、表現や語彙を繰り返し聞いたり言ったりする活動を行っているが、活動内容に目新しさがないと、次第に児童の意欲が減退する。
- 単元終末で定着していると思われた表現や単語でも、学期末になると忘れていたことが多かった。前の単元の内容についても、日常的に触れさせる機会を作ることが必要であるが、その時間確保が難しい。

教材について

【成果】

- Hi, friends! に収録のチャンツや、歌、ジングルのように音声と映像が一緒になってリズムよく提示される教材は、児童の記憶に残りやすい。
- 絵本は、同じ表現が何度も自然に繰り返されているため、児童にとって絵（意味）とともに音声が残りがやすく、インプットのための教材として適している。
- 児童が知りたい・表現したいと思わない英語を繰り返しても定着は図られない。児童にとって興味や関心をもって取り組める教材や必然性のある場面を用意し、児童が「考えながら話したり書いたりしてコミュニケーションする」活動を行うことで定着につながる。

【課題】

- 児童自身が「どんなことが話せるようになったのか」「どんな内容が聞き取れるようになったのか」を実感し、「次はどんなことができるようになることを目指すのか」の見通しをもつために、CAN-DOリストを効果的に活用することが必要である。